資料

（平成二十六年十二月）

第五十九回「合宿教室」（淡路）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

公益社団法人　国民文化研究会

第五十九回〝合宿教室（淡路）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成二十六年九月五日（金）から八日（月）まで三泊四日間

ところ　兵庫県南あわじ市「国立淡路青少年交流の家」

参加総数　一〇八名

目　次

〝はしがき〟に代へて　……理事長　今林賢郁…2

大学別参加者数・その他の人数の内訳　……4

〝合宿教室〟59年の歩み　……5

〝合宿教室〟の日程表（三泊四日）　……7

第59回〝合宿教室〟のあらまし　……8

走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…25

合宿中に創作された「短歌詠草」……参加者全員…69

あとがき　……83

カメラ・レポート21枚（27ページから67ページの左頁に掲載）

〝はしがき〟に代へて

（公社）国民文化研究会理事長
今林賢郁

昭和三十一年（一九五六）の本会創立以来、第五十九回目を迎へた「全国学生青年合宿教室」を、今年は九月五日（金）から八日（月）までの三泊四日間、兵庫県南あわじ市「国立淡路青少年交流の家」に於いて開催致しました。淡路島ははじめての開催地でした。

古事記・日本書紀の「国生み神話」によれば、淡路島は大八洲国（日本列島）のうち、最初に誕生した島と伝へられるところであり、また、四国と結ぶ大鳴門橋のたもとでは、潮の流れが生み出す、激しく大きい「鳴門海峡の渦潮」が名高く、二日目午後のレクリエーションでは「渦潮」観光が行はれ　繰り返される潮のうねりの迫力に圧倒される思ひでした。合宿教室の特色である「短歌創作」では、この時の模様を詠んだ歌が多数提出されました。又、「戦時平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられた、全ての祖先のみ霊」をお迎へして厳修された三日目夜の「慰霊祭」は、今回初めて浜辺の近くで執り行はれました。夜の静寂の中、波音もかすかに聞こえて厳かな慰霊祭となりました。

今年の招聘講師である中西輝政先生は、演題の「『日本を取り戻す』とはどういうことか」で、「日本の領土を取り戻す」「奪はれた日本の歴史を取り戻す」「日本の自主・主権・独立を取り戻す」の三点を取り上げられ、それぞれについて具体的にお話を展開されました。内部講師として登壇した本会会員諸兄は、「明治の先人の生き方」として後藤新平の足跡を辿り、また、柿本人麿と防人の歌を取り上げて万葉の「ますらを」たちを語り、更には、「明治天皇の大御心」を心をこめて参加者に語りかけてくれました。このやうな諸講義を参加者は全心身で受け止め、班毎に別れて行はれた討論の場で感想や疑問を述べ合ひ、そのやり取りの中から、日本人としての自覚やお互ひの友情も醸成されていったことと思ひます。

長い間、私どもがこの合宿教室で若い人たちへ訴へ続けてきたことは、自国の歴史や文化伝統について、人から与へられた物差しではなく、自分の心と目で感じて考へる、その努力を開始して欲しい。また現下の諸問題についても、他人事ではなく自分の問題として捉へ直して欲しい。その姿勢で学問に取り組んで貰へれば、必ずや真っ当な日本人としての自覚と自信が生れるに違ひないと言ふことでした。

この「感想文集」は合宿日最後の帰り際に「走り書き」で書かれたもので、充分意をつくされたものではありませんが、精魂を傾けて過した合宿での思ひを書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文を載せられないのが残念ですが、ご精読賜りますれば幸甚に存じます。

この「感想文集」の編集に際しては、若干の会員有志が休日を割いて取り組んでくれました。また、この合宿の運営に当たった運営委員長の廣木寧さんはじめ運営委員の諸兄、指揮班長の古川広治さんら指揮班の皆さんに心から感謝致します。

最後になりましたが、この合宿教室事業を実施するに当たり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に代り心から厚く御礼申し上げます。

来夏（平成二十七年）の「第六十回合宿教室」は八月二十九日（土）から九月一日（火）の三泊四日間、静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」で開催します。

詳細の合宿案内パンフレットは三月ごろ配布予定です。多数の皆様のご参加をお待ちいたします。

第 59 回全国学生青年合宿教室（平成 26 年 9 月 5 日～ 8 日）　於「国立淡路青少年交流の家」

参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東京大学1　早稲田大学2　東京理科大学1　國學院大學1

専修大学1　拓殖大学1　明星大学1　皇學館大学1　京都大学3

立命館大学1　福岡教育大学2　福岡大学2　中村学園大学2

西南学院大学1　筑紫女学園大学1　佐賀大学1　長崎大学1

熊本県立大学1

計　二十四名（うち女子四名）

（社会人参加者）　十四名（うち女子四名）

（招聘講師）　一名

（国民文化研究会）　六十四名

（事務局・写真）　二名

（見学者・慰霊祭協力）　三名

総計　一〇八名

―“合宿教室” 59年の歩み―

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
41	〃 8年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富　士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿　蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊　勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧　島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈　良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊　勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚　木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
55	〃 22年	阿　蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	〃 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	〃 24年	阿　蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
58	〃 25年	厚　木	142	伊藤哲夫・國武忠彦
59	〃 26年	淡　路	108	中西輝政・小柳左門
累計・参加人員			14,702	

（公社）国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

平成26年　第59回全国学生青年合宿教室　日程表　（淡路）

9月5日(金)	9月6日（土）	9月7日（日）	9月8日（月）
	起床（6：00）	起床（6：00）	起床（6：00）
	(6:30) 朝の集ひ	(6:30) 朝の集ひ	(6:30) 朝の集ひ
	(7:00) 朝の集ひ（施設）	(7:00) 朝の集ひ（施設）	(7:00) 朝の集ひ（施設）
	(7:20) 朝食(7:20～7:45)	(7:20) 朝食(7:45～8:10)	(7:20) 朝食(7:20～7:45)/退所準備
	(8:30) 古典講義 万葉の「ますらを」たち ー人麿と防人の歌をめぐってー 岸本　弘先生	(8:30) 講義 「明治天皇の大御心を仰ぐ」 小柳左門先生	(8:30) 合宿をかへりみて 今林賢郁氏 (9:00) 全体感想自由発表 (9:45) 合宿運営委員長挨拶 廣木　寧氏 (10:05) 地区別懇談 (10:35) 閉会式 （挨拶）主催者代表 （挨拶）学生代表 (11:05) 感想文執筆 (11:45) 第二回短歌創作 (12:00) 清掃 昼食(12:20～12:50)・解散 (13:00)
	(10:00) 班別研修	(10:00) 班別研修	
受　付：13:00 開始 (14:30) 開会式 （挨拶）主催者代表 国民文化研究会理事長　今林賢郁氏 オリエンテーション 合宿趣旨説明及び諸注意伝達 合宿運営委員長　廣木　寧氏 合宿指揮班長　古川広治氏	(12:00) 昼食(12:00～12:20)	(12:00) 昼食(12:00～12:20)	
	(13:00) 短歌導入講義 北濱　道先生	(13:00) 学生体験発表 (13:45) 会員発表　横畑雄基氏 創作短歌全体批評 青山直幸先生	
	(14:00) 野外研修・短歌創作 鳴門渦潮船上散策	(14:45) 班別短歌相互批評	
(15:30) 自己紹介及び班別研修 「日本への回帰 第49集」輪読			
(17:00) 夕べの集ひ(施設)	(17:00) （短歌提出） 夕べの集ひ(施設)	(17:00) 夕べの集ひ(施設)	
(17:30) 夕食(17:30～18:00) 入浴(18:30～19:30)	(17:30) 夕食(17:30～18:00) 入浴(18:00～18:45)	(17:30) 夕食(18:00～18:30) 入浴(18:30～19:30)	
休憩	(18:45) 休憩 (19:00) 写真撮影	休憩	
(19:30) 合宿導入講義 「明治の先人の生き方」 ー後藤新平の足跡に学ぶー 武田有朋先生	講義 「『日本を取り戻す』とはどういうことか」 京都大学名誉教授 中西輝政先生 (20:30) 質疑応答	(19:30) 講話 園武忠彦先生 (20:00) 慰霊祭説明 (20:30) 實遣矢太郎 先生 慰霊祭	
(21:00) 班別研修	(21:00) 班別研修	(21:30) 班別研修	
(22:30) 就寝	(22:30) 就寝	(22:30) 就寝	
(23:00) 消灯	(23:00) 消灯	(23:00) 消灯	

第五十九回〝合宿教室〟のあらまし

第一日目　（九月五日・金曜日）

第五十九回全国学生青年合宿教室は、兵庫県南あわじ市「国立淡路青少年交流の家」にて開催された。全国から集った参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

開会式

福岡大学三年岡部智哉君の開会宣言で合宿教室は幕を開けた。国歌斉唱に続き、「戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先のみ霊」に黙祷が捧げられた。主催者代表挨拶で今林賢郁理事長は「日本は長い歴史を持つ国であり、日本人は四季の自然の中で細やかな心遣ひを育んできた。自分の国の歴史と伝統に自信を持ち、堂々と逞(たくま)しく日本人として生きるにはどうすべきかを考へる契機になれば有難い。また現在の国内外の諸問題に対し、他人事ではなく自分の目で見て感じて自身の事として考へる力を身につけてほしい」と述べた。次いで廣木寧合宿運営委員長は「哲学とはその民族に最もふさはしい生き方を示すもの。それが素晴らしければ素晴らしいほどそれは詩となり、日本であれば歌となる。この合宿で、まさに自分自身に語られてゐると思へるやうな言葉や文章に出会って欲しい」と語りかけた。

合宿導入講義

「明治の先人の生き方―後藤新平の足跡に学ぶ―」

NTT西日本㈱　武田有朋先生

冒頭で、学生時代に台湾を訪れた体験を紹介し、台湾近代化の礎を築いた後藤新平の足跡を辿ることで、合宿のテーマ「先人の詩と哲学に生きるあかしを見出さう」といふことを考へてみたいと述べられた。

後藤新平が大きな業績を残し得たのは、彼独特の『生物学の原理』といふ理念であった。これは、医師としての経歴を持つ彼ならではのもので、生物の進化と同様に長い年月を経て培はれてきた慣習には相応の意味があるのだから、その慣習を尊重しながら実情に合ふ方策を考へるといふことであったと語られた。そして、後藤新平の言葉に触れ、晩年目指した「政治の倫理化」といふ運動について、大正末期、物質力崇拝に陥った社会において精神主義とのバランスを取り戻すことを強く訴へた後藤は、我が国における政治の理想像は「聖徳太子の御治蹟である」と指摘してゐることを紹介された。

また、後藤新平が繰り返し述べてゐる「皇恩・国恩」といふ言葉から、今上陛下の御製を紹介しながら、国民が心の拠りどころとして陛下を戴けることのありがたさについて、自らの所感を述べ、学生に、天皇の御存在について、ぜひ班員とじっくり語りあってほしいと語られた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、そのうへで各々の思ふことを論じ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせゐか、初めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も

活発となり、班員相互の交流が深められていった。

二日目　（九月六日・土曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。施設での「朝の集ひ」に先立ち、合宿参加者は、施設近くの「吹上浜」に出、対岸の徳島の山々を遠く望みながら、北九州市立医療センターの森田仁士氏による唱歌の紹介を受け、合唱を行った。唱歌は次の通りである。

二日目（九月六日）「われは海の子」
三日目（九月七日）「桜井の訣別」
四日目（九月八日）「水師営の会見」

講　義　万葉の「ますらを」たち―人麿と防人（さきもり）の歌をめぐって―

元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘　先生

合宿の地・淡路島にふさはしい題材として『万葉集』の人麿と防人の歌から語り始め、今回のタイトルは夜久正雄先生の『短歌のあゆみ』の中にある文章のサブタイトルをそのまま拝借したものだと語られた。

淡路の野島（ぬ）の埼の浜風に妹（いも）が結べる紐吹き返す

を含む柿本人麿の羇旅（きりょ）八首を声高らかに読み上げながら、鹿持雅澄（かもちまさずみ）の評言などを紹介された。そして人麿に遅れること五、六十年、同じ瀬戸内を西下した一群の青年達がゐたとして、「防人の歌」を紹

介され、自身にとっても忘れがたい、

忘らむと野ゆき山ゆき我来れど我が父母は忘れせぬかも

の一首について語られた。そして防人の歌について書かれた黒上正一郎先生の〈あるがまゝの人生を戦ひ生くる悲喜の情意である〉云々のお言葉に、詠み人の心をしみじみと偲ばれた。また夜久先生が青年時代に書かれた〈心にかへりみながら、「かへりみず」とうたひ出しながら…防人たちの目は筑紫に向いてゐた〉の一文の意味するところを、その歌にたどり、防人の別れの心を追痛みて歌った「大伴家持の長歌」を朗々と暗誦して講義を閉ぢられた。

短歌創作導入講義

元㈱アルバック　北濱道先生

初めに藤原敏行の「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」を取り上げ、「千百年ほど前の歌だが、作者が感じた一瞬の〝風の音〟を、こちらも聞くやうだ。言葉がよく選ばれた歌は作者の心のゆらぎを伝へる力がある」と指摘された。この歌を例として短歌の作り方を、「五七五七七の三十一音で詠む」「一首一文で詠む」「心に言葉が一致するまで推敲する」「相手にわかるやうに詠む」等々を説明された。

次に、この合宿教室が学びの道筋とする「心の交流」の原点ともいふべき黒上正一郎先生と梅木紹男先生の友情を、その逸話と歌に偲ばれた。また、大学時代にお世話になった弓立忠弘先輩（五月に五十五歳で逝去）、社会人になってからも交流を深めてゐた大日方学兄（四月に四十九歳で逝去）の歌に、その人柄を偲ばれた。

そして、『短歌のすすめ』から、有限の命を何か永遠のものにつなぎたいといふ気持ちが短歌といふ形式に生命を吹き込む、本当にまごころを詠んだ歌は必ず人の心に響いてくると説かれた。

野外研修（短歌創作―「渦潮」見学）

短歌創作をかねての「渦潮」見学のため、参加者は貸切バスに分乗して福良港に向った。多くの観光客で賑ふ埠頭で遊覧船に乗り換へた参加者は、瀬戸内の小島の間を進む船からの眺めに見とれながら「鳴門の渦潮」へと近づき、潮の満ち干が織りなす天然自然のエネルギーの神秘と大きさに目を瞠った。時をり降る小雨がここち良く感じられる一時間余の「船旅」であったが、多くの歌が詠まれ提出された。

講義　「日本を取り戻す」とはどういふことか

京都大学名誉教授　中西輝政先生

「日本を取り戻す」といふ言ひ方は安倍政権のキーワードでもあるが今日お話しする意味合ひはそれとはまったく異なる。もう少し大きな文脈でお話したい―と講義の冒頭で述べられ、以下の三点を指摘された。第一は「日本の領土を取り戻す」といふことで、日本といふ国の問題を論ずる上で領土といふ事柄は常に意識しておく必要がある。しかもその領土は侵された儘になってゐる。或ひは現在進行形で侵されつつあると話され、たとへ秋にプーチン大統領が来日しても北方領土は返還はしない。韓国に不法占拠された竹島は従軍慰安婦問題の裏に隠されてしまってゐる。さらに今一番大事にしなければならないのは尖閣諸島で、沖縄を含めこの周辺をいかに守りきるかが領土問題の最重要課題であると指摘された。

第二は「奪はれた日本の歴史を取り戻す」といふことで、昭和二十七年にサンフランシスコ講和条約が発効し、その後昭和四十七年に沖縄返還協定が締結された経緯を踏まへつつ尖閣諸島が沖縄県の一部であり、日本の主権下にある領土であると説かれ

た。中国が条約の締結国でないにも拘らず尖閣諸島は日本の領土ではないと言ひ出してゐることに触れられ、日本の国土を守るといふことは日本の歴史を取り戻すことと背中合はせであることを強調された。そして、日本人の一人一人が、とくに若い人々が本来あるべき歴史認識を持つことが日本を守ることに繋がると説かれた。

第三は「日本の自主・主権・独立を取り戻す」といふことで、現在の日本国憲法が占領軍によってどの様な形で押し付けられたかを当時の吉田茂外務大臣の側近で通訳をしてゐた白洲次郎氏が「斯の如くしてこの敗戦最露出の憲法案は成る『今に見ていろ』と云ふ気持抑へ切れずひそかに涙す」と手記に記した事実に触れられ、その白洲氏にして後の経済的繁栄から憲法観を変へた。「豊かさの悲劇」といふほかはないが、憲法は国の主権そのものであり核心的価値でもあるから、我々は一日も早く自主憲法を取り戻さなければならないと述べられた。

最後に、大東亜戦争に至る幾つかの段階を説明され、内政の混乱を避け国家意思を統一して行くことの重要性を指摘され講義を終へられた。

第三日目　（九月七日・日曜日）

講　義　「明治天皇の大御心を仰ぐ」

特定医療法人・原土井病院院長　小柳左門先生

最初に、「私達のこの国で、神話の昔から受けつがれたかけがへのないもの、それが皇室の御存在であると思ふ。しかもただ続いてきたのではなく、代々の天皇様が並々ならぬ思ひで国民の平安を祈られた御努力と、それを無言のうちに感得した国民の真心とのふれあひによる賜物であらう」と語られた。

明治天皇は、幕末から王政復古に至る激動の歴史のなかで、先代の孝明天皇の突然の崩御により、若くして皇位を継承された。

朝政一新の始めに、五箇条の御誓文を神前に誓はれた日、国を背負ふべき臣下に対して自ら宸翰（お手紙）をお与へになったが、その内容たるや国民の運命を一身に背負はんとする御覚悟に満ち、「君たるの道を損ふことなきやうにと祈られる切々たる大御心を伝へてゐる」と語られた。

「暁のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかがあらむと」とのお歌に示されたやうに、朝夕に内省され、国民のために心を砕かれる大御心は、あまたの御製に表はれてゐる。民を慈しみたまふ御製が数多くあるなかで、ことに心を打つのは日露戦争での御製である。「国の存亡をかけた戦に、その御心痛はひとかたならず、国の安泰とともに世界の和平を一心に祈られた」と指摘された。前線の兵士を思って夜も遅くまで寝られず、極めて質素な日々を送られ、大御心は戦場には立たぬ銃後の国民にも及んでゐたことを御製にたどられた。そして戦陣に斃れた兵士の慰霊とともに、敵方にも敬意を示されたその慈愛の大御心は、永遠に光を放ってゐると述べられた。

学生発表

福岡大学経済学部　四年　小　林　拓　海

福岡大学で「福大寺子屋塾」といふ勉強会に参加してゐる体験を語った。輪読の教材となってゐる平泉澄先生の『少年日本史』の一節「大東亜戦争」の箇所を読み上げ、黒木博司海軍少佐に感銘を受けて当時の青年の心を知ったと語った。そして、愛国の至誠があれば国を守ることができることを学んだと語った。

拓殖大学政経学部　二年　大　貫　大　樹

大学の先生に誘はれて昨年の厚木合宿に参加した。新鮮なものばかりで勉強になった。とくに三日目の慰霊祭に参列して胸を打たれ感動して次回も参加したいといふ気持ちになった。「心の眼」を持つことの大切さを授業で学んだが、この感覚は心の眼の基礎になると思ふ。この感覚を忘れないやうに心の眼を持てるやうになりたいと語った。

京都大学経済学部　四年　山内　遼

友人の紹介で大学の先輩、庭本秀一郎先輩にお会ひして以来、国文研の勉強会に参加してゐる。その勉強会で、『太平記』を読んだが楠木正成の散り際をはじめ、古典に見出す偉人の姿を通して、自らの今の心を顧みるといふことの大切さを学んだ。今後もその視点から、自らの心、志の在り方を省み続けたいと語った。

会員発表

㈱寺子屋モデル専任講師　横畑雄基氏

『古事記』編纂から千三百余年、関連する数多くの図書が刊行されてきたが、多くは語句解説に偏ってゐる。夜久正雄先生が昭和四十一年に著された『古事記のいのち』（国文研叢書№1）に「（『古事記』に）一貫してあらはれてゐるものは、日本といふ国家の建設に没頭し、国家の統一に心を砕いた人々の理想」であるとの一節があるが、惹きつけられた言葉であった。『古事記』に触れる時、知的解釈に留まり偏ること無く、数々の苦難を乗り超えて国家の建設と統一がなされたことを伝へんとした先人の声

に耳を傾ける読み方をしてみたいと、日頃の読書体験を披瀝した。

創作短歌全体批評

三菱地所㈱都市開発二部専門調査役　青山直幸先生

短歌創作は、「感動を正確に、素直に表現すること」が基本であるが、「うまい歌を詠んでやらう」などと〝欲〟を出すと、概括的な不正確な表現の歌になりがちであると指摘され、「このあと予定されてゐる班別の短歌相互批評では、まづ作者の気持ちを思ひやり、どういふことに感動したのかといふ点に心を寄せ、その感動をどういふ言葉を使ったら読む人に正確に伝はるかを班員でよく話し合ひ、整へてゆく共同作業となるやう努めてほしい」と述べられた。

続いて、参加者の短歌を例に、一つ一つの言葉を具体的に指摘しながら直していかれた。直された歌について、壇上から直接作者に「お気持ちに添った表現になりましたか」と問ひかけられるなど一体感のあるなごやかな一時となった。

最後に、国文研会員の歌をいくつか紹介され、青森市の長内俊平氏が合宿に寄せられた短歌の中にあった「よき友を得て帰りませ」といふ言葉をよく胸に留めて欲しいと結ばれた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝へることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にしようと尽

力し時間を超過してしまふ班も多くあったが、その分自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

講話　「国を守るといふこと」

昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦　先生

若い社会学者の「戦争が起っても逃げ出すつもりの若者が増えて好ましいことだと思ふ」との発言に触れ、尖閣周辺では日夜海上保安庁の巡視船が警戒し、自衛隊員は不測の事態に備へて「身をもって国民の負託にこたへる」と誓ひ、任務に命をかけてゐる。七十年前、日米が死闘を繰り返したペリリュー島では遺骨が今なほ眠ってゐる。誰が国を守るのか。かつて小林秀雄は「銃をとらねばならぬ時が来たら、喜んで国の為に死ぬであらう」と語った。学問とは、この覚悟と連なるものだ。自らのこととして思ふことから、責任感が生れるのではないかと語った。

慰霊祭

齋行に先立ち寶邊矢太郎先生（元山口県立高校教諭）から慰霊祭の趣旨と祭儀の手順が説明された。開会式の冒頭で「戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先のみ霊」に黙祷が捧げられたが、「この慰霊祭は慰霊祭といふ一つの儀式を通して私たちの心をととのへ、国のために尊いいのちを捧げられたすべての祖先のみ霊をお迎へし、海の幸山の幸をお供へして、おもてなしをすること」であると説かれ、「その方々が後の世に遺されたお気持ちをお偲びし、私たちもまた受け継いでゆきたいとの思ひをこめてお祭りをしたいと思ひます」と述べられた。またみ霊に対する古式に則った立ち居ふるまひ、即

ち「最敬礼」「二拝二拍手一拝」等の仕方を具体的に示された。祭儀の中で奉唱される『万葉集』に由来する「海ゆかば」と、その作曲者である信時潔についても詳しく説明された。

慰霊祭は宿舎から徒歩三、四分位ほどの浜辺（吹上浜）で厳修された。四方に竹を立て、しめなはで囲まれた齋庭は、見るもすがしく清められてあった。祓詞に代へて山口秀範常務理事（寺子屋モデル代表取締役社長）による、三井甲之詠の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の朗詠に始まり、磯貝保博参与（元講談社資料センター室長）による御製拝誦、澤部壽孫副理事長による祭文奏上と続き、次いで参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。私たちの祖先が古より自然を、亡き人のみ霊をお祀りしてきたそのみ心も仰ぎつつ古式ゆかしく行はれた。潮騒を耳に満天の星を仰いだ参加者それぞれの心に何かが萌す祭儀となった。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭文」である。

御製拝誦

明治天皇

天（明治三七年）

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな

ひさかたのあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ

心（明治三七年）

しきしまの大和心のををしさはことある時ぞあらはれにける

かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のこころは

日（明治四二年）

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきはこころなりけり

昭和天皇

戦災地視察三首（昭和二十年）

戦のわざはひうけし国民（くにたみ）をおもふ心にいでたちて来（き）ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

祭り（昭和五十年）

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

今上天皇

東日本大震災の被災者を見舞ひて（平成二三年）

大いなるまがのいたみに耐へて生くる人の言葉に心打たるる

歌会始お題「岸」（平成二四年）

津波来し時の岸辺は如何なりと見下ろす海は青く静まる

水俣を訪れて（平成二五年）

患ひの元知れずして病みをりし人らの苦しみいかばかりなりし

歌会始お題「静」（平成二六年）

慰霊碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり

祭文

日の本の神話・古事記（ふることふみ）に伊邪那岐命（いざなぎのみこと）　伊邪那美命（いざなみのみこと）の二柱の神が御合（みあ）ひまして産みたまひし淡道之穂之狭別島（あはぢのほのさわけのしま）と呼ばれ

し淡路島に　今し天つ日は沈み、潮の香豊かに夕風そよぐ「国立淡路青少年交流の家」の前の浜辺を　み祭りの斎場と定め

今宵　平成二十六年九月七日　われら集ひて　祖国日本の遠き古へより今に至る迄　平時戦時を分たず　み国のために尊きいのちを奉げ給ひし数限りなきみ祖たちのみたまを　これのみ祭りの斎場に魂よばひまつり　ささやかなれども海の幸・山の幸種々の品をみたまのみ前に献げまつり　をろがみまつりて　われらは　みたまをなぐさめまつらむとす

顧みれば　開国による西洋文化の流入は　明治の御代に　日本の文化・伝統を軽視する風潮を齎し　特に共産主義は大正　昭和の御代に　国の内広く軍の中枢まではびこり憂ふべきさまとはなりぬ　さらに　全国民一丸となりて戦ひし大東亜戦争に敗れし後の占領政策による日本の文化・伝統の徹底的否定は　厳しい言論統制と検閲　それに呼応する知識人らの動きとも相俟って　自虐史観となって現れ　日本人の精神を蝕み　み国の行末を愈々危ふくすれども　偏に昭和天皇　今上陛下の御聖徳に導かれ　み国の生命は守られにけり　また　東北大震災に於いては消滅せしと思はれし大和魂はよみがへり　今日　本来の日本を取り戻さむとする兆も見ゆるは心強き事なり

しかれども　み祖の生き方に誇りと自信を失ひし心は　教育界を始めとして　学会　財界　政界等全国津々浦々の国民にまではびこり　道をふみ迷ひ　日本の教育・外交・国防などに、独立自尊の精神のよみがへる日は遠く　今ただならぬみ国のさまとはなりぬ

かかる時　われら　五十九年の歳月を重ねしこの合宿教室に集ひ　老いも若きも　もろ共に心を働かせ　言葉を修め　日本文化の良き伝統を学び　共に世に立つべき友となりなむと　中西輝政先生および諸講師のご講義に耳を傾け　大み歌を心に味はひ　班別討論などを重ね　朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ

今より後は　大君のみことかしこみ　み祖のみたまのまもりを信じ　つとめの庭に　学び舎に　はたまた教への庭に　世の正道をきりひらき　国の内外にはびこるまがごとを　もろともに力を協せ　打ち払はむと誓ひまつらむ

天翔けるみ祖のみ霊よ　願はくは我らのゆくてを守らせ給へと　ここに第五十九回全国学生青年合宿教室参加者一同に代り　澤部壽孫　謹み敬ひ畏み畏みも曰す

第四日目

（九月八日・月曜日）

合宿をかへりみて

今林賢郁理事長は、初日からの日程に添ひながら、合宿を振り返った。

中西輝政先生の「『日本を取り戻す』とはどういうことか」の講義では、その価値がなくなれば日本が日本でなくなるやうな価値、日本人として日本国家として守るべき最終的な価値は何かが問はれたと述べ、「天皇様、皇室を国の中心に戴いてゐる日本の国柄」こそ守るべきものであって、「天皇は初代神武天皇から百二十五代の今上天皇まで一度たりとも消えたことのないご存在である。わが国には皇室が前面に出られて国家の危機を乗り切ったといふ歴史がある。儒教仏教など外来文化を受容摂取する方途を示された聖徳太子、植民地化の危機を克服すべく維新政治の中心に立たれた明治天皇、大東亜戦争期に太平への御聖断を下された昭和天皇。かくして日本国家の命脈が守られ日本が続いてゐるから、今の私やあなた達がゐる。陛下はいつも国家の平安と国民の幸せを祈り続けてをられる。天皇様のお気持ちを国民は仰いできた」と国柄の特質を改めて語った。

最後に「合宿を契機にひとりひとりが自ら勉強して、自分の言葉で日本に生れてきて良かったと自信を持って言へるやうになっていただければ、こんなに有難いことはない」と実感を伴った学びの大切さを説いた。

全体感想自由発表

閉会を前にして、参加者は登壇して胸中の思ひを率直に述べた。

「自分はよく勉強してゐたつもりだったが、まだまだ井の中の蛙だった」「中西輝政先生が『領土』『歴史』『自立』を取り戻さねばならないと言はれたことに感銘を受けた」「防人の歌を読んで、征く人の心情に思ひを寄せることができた」「ここで学んだことを学友に伝へて行きたい」「自分は教師を目指してゐるが、この合宿で学んだことを子供達に語りたい」等々。

中には「心に残った明治天皇の御製を拝誦したい」と読み上げる者、班別研修の模様を「自分は話し下手だが、班員が一所懸命に聞かうとしてくれた」と紹介する者、「自分の歌を皆が心を一つにして添削してくれたことが最も心に残った」と短歌相互批評の体験を語る者など様々な感想が率直に発表された。

合宿運営委員長挨拶

廣木寧合宿運営委員長は、本合宿の惹句「先人の〝詩と哲学〟に生きるあかしを見出そう！」に触れ、合宿導入講義で紹介された後藤新平の、物質力崇拝の風潮への痛烈な批判は、その中にゐては〝詩〟は生れないといふ痛切な認識、哲学であったこと、古典講義での万葉集の防人の歌の「今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は」は、そのものが詩であり、かつ往時の我々の先祖の哲学の表現に他ならないことを指摘され、歴史には、それを見てゆくことで私達が励まされる〝詩と哲学〟といふものがあると示された。そして中西輝政先生の講義での、中国で歴史について話すと、日本側の意見が真っ二つに割れるといふことについて、歴史を、さういふ他国が日本を弱めんとする政策的意図に晒されたものから、〝詩と哲学〟に満ち溢れたものにしなければならないといふことが、中西先生の「歴史を取り戻す」といふ言葉の真意と理解してゐる、と切言された。更に、ネルソン提督を英雄として終生慕った東郷平八郎、ヨーロッパ留学に行く従弟に荷物としてでいいから連れて行ってくれと懇願した乃木希典の逸話を紹介され、日本人はとにかく外国の新しい文明が好きであるが、しかしその芯には日本人としての〝詩と哲学〟があり、日本人といふものは、その中で外来文明を摂取融合し、つねに自己の文明

を蘇らせてきた大変な民族である。我々もその血を受け継いでゐる。どうか学問を続けていただきたい、と呼び掛けられた。

閉会式

国歌斉唱に続き、主催者を代表して挨拶した澤部壽孫副理事長は、学生時代の参加経験を回顧して、「〈忘らむと野ゆき山ゆき我来れど我が父母は忘れせぬかも〉との防人の歌に出会って、この歌には日本人のまごころが表現されてゐるといふことをお聞きして、千年を越える昔にこの歌を詠んだ若い作者を偲んだものだった。また招聘講師の小林秀雄先生は〝二十歳代で志を立てないと遅い〟と仰有った。無責任な言論が蔓延(はびこ)る社会に出てたぢろがないために、自分の眼力を深める学問を続けて欲しい」と結んだ。参加学生代表の挨拶で立命館大学文学部三年の藤新朋大君は、事実の羅列といふ「歴史」だけでなく、先人たちの残した言葉や和歌にその心を学び、触れるといふことを経験したが、このやうな機会をこれからも持ち続けることが重要だ、と述べた。國學院大學神道文化学部二年の横川翔君の閉会宣言を以て合宿教室は閉ぢられ、日常での新たな取り組みが始まった。

合宿運営

【本　部】

運営委員長　㈱寺子屋モデル役員　廣木　寧

運営委員　熊本県立熊本高校教諭　久保田　真

北九州市立医療センター　森田　仁士

元㈱アルバック　北濱　道

【指揮班】

指揮班長　福岡労働局　古川　広治

指揮班　福田　仁

FTIコンサルティング　伊藤　俊介

NTT西日本㈱　武田　有朋

【事務局】

事務局長　国民文化研究会事務局長　奥冨　修一

（事務局協力）

国民文化研究会副理事長　澤部　壽孫

栗方　惠美子

元新潟工科大学教授　大岡　弘

元川崎重工業㈱　山本　博資

元三菱重工業㈱　島津　正數

㈱ラック　高橋　俊太郎

【写真班】

中澤　武之

前川　正延

宗田　直紀

【慰霊祭協力】

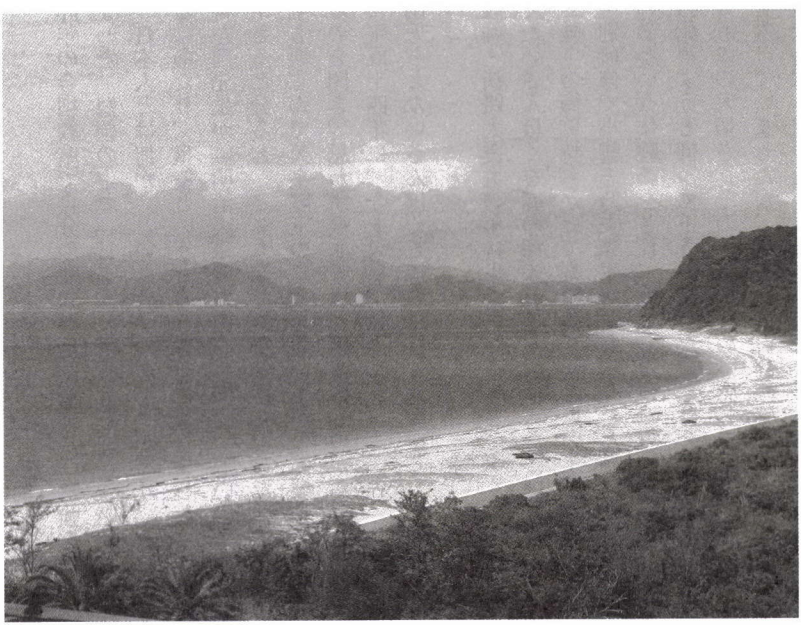
【見　学】

藤村　孝信

走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班―男子学生―

生き方の重要な指針を得られた

（東京大学大学院　工　二年　菊地建人）

大学の書籍部でたまたま目にとまったのが小林秀雄先生の『学生との対話』という本でした。その本で合宿教室のことを知り、締切りの直前に申し込む、私がこの合宿に参加したのはその様な軽いきっかけからでした。

合宿では、日本という国は何をもって日本と言えるのだろうと考えました。考える中で、その問いの答えはつまるところ個々人の中にあるということです。「国家」の構成員それぞれの心の中に確かな手触りとして感じられる日本らしさ、それが日本という国の総体をなすのだと思います。「日本を取り戻す」ためには何よりもまず「日本」について、自分の目で見て考え抜かなければならない。これまでに他人の言論を見る度に意見を変え続けてきた自分を恥かしく思いました。まさに偶然とも言える出会いから始まった合宿教室でこの様な生き方の重要な指針を得られたことに感謝しています。四日間という短い合宿でしたが、どうもありがとうございました。

友と出会ひ机囲みて夜昼といかに生きむと語り合ひけり

涙するほど感ずるものがあった

（福岡大学　経　四年　小林拓海）

昨年の合宿教室で自分の勉強不足を痛感し、勉強を続けてきました。勉強の中で「日本人の生き方とはどういったものか。日本人とは何か」という一つのテーマがあり、それを考えるにあたり、皇室というものを考えておりました。合宿で小柳左門先生が「明治天皇の大御心を仰ぐ」という講義をして下さると分ると、とても楽しみな気持ちでした。講義では先生も涙ぐんで天皇陛下のことを想いながら御製を読まれているのを聞き、思わず涙するほど感ずるものがありました。特に平成十四年に、今上天皇が詠まれた

園児らとたいさんぼくを植ゑにけり地震ゆりし島の春深みつつ

阪神・淡路大震災の年に生まれた子等と、すくすく伸びていくたいさんぼくを春の深まるころに植えたという、その情景と陛下の御気持ちがとても綺麗だなと思いました。

班別研修で小柳志乃夫先生が落ち込んだときに御製を読んでいるという体験談をされ、そして一つの短歌を覚えることから始めようと仰って下さいました。私は今回の合宿で歌というものの大切さ、その意味を始めて感じました。今までは歌を避けていましたが、これから自分の気持ちを素直に出して短歌を詠み、短歌から日本のすばらしさを学んでいきたいと思います。

小柳左門先生の講義を聞きて

涙をのみ今上陛下の御歌読む先生を見て我も涙す

合宿で気づいた三つのこと

（東京理科大学　理　一年　切明航太）

口語の流れるような文が好きなことを再認識した。合宿で短歌作りに挑み、また、御製などの解説も聞いたが、どうも三十一文字から詠み手の気持ちを読み取り切れないことが多く、また、自分で作る時、何を詠めばよいのか、つかみ切れなかった。これは自分が未熟だからであろうが、やはりシェークスピアの様な流れ出る流暢な表現の方が自分の感性に合っているようである。とはいえ、それだけで終えるのは日本に生まれて勿体ないので、これからも和歌の勉強を続けたい。

次に、事実を知る努力を怠らないこと。歴史を知り、国を知って初めて自分の中に確固たる軸が生まれるのだと思う。それを持ち、皇恩・国恩に応える人生を送りたい。

最後に、人と出会い語る大切さ。自分で考え悩み続けることが大切とのことであったが、それと同じ程度に、自分の考えを他人に伝わるように話し、また他人の意見を聞き、衝突したり意見を取り入れたりする。それもまた価値観や判断軸を養うのに必要なことであると思う。そのような機会に巡り会えて実に有り難い思いである。

カメラ・レポート1

全国から集った参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

宿を抜け浜辺で遊ぶその時の海と空の青の何と美し

無事に終ることができた

（中村学園大学　流通　二年　高尾弥沙樹）

第59回と長い歴史のある合宿に、私は今回初めて参加させて頂きました。正直な所、この合宿に来る学生と話せる自信はありませんでした。食事も飯と汁物しかなかろうと思い込んでいました。さらに追い打ちをかけるかの如く「ここの人たちには気をつけろ」と福岡にある大学の人に言われ、どうなることかと思いましたが、終わってみると腹を下したが、無事に終ることができて安心しています。

来年は後輩を送りこもうと考えています。

待ちわびた帰宅の日はいま来たものの別れる友とまたいつか会はむ

皇恩への恩返しをしなければならない

（皇學館大学　文　一年　江崎義訓）

万葉の歌人から大東亜戦争で国の為に亡くなられた方々の和歌まで、先人の率直かつ哲学性のある和歌に圧倒され、自らの小ささ、勉強の足りなさを痛感しました。

また、明治天皇や今上陛下の御製に私たち国民は大きな慈愛の心を受けてゐるといふことを感じ、涙が溢れてきました。私は天皇の存在に思ひを致すと仁徳天皇の「民のかまど」の話を思ひ出します。「民のかまど」の話のやうに、本来、天皇陛下からの慈愛の心を私達国民は何かしらの形で表現し、皇恩への恩返しをしなければならないのですが、国民の大部分はその恩にさへ気付いてゐません。幸運にも私はこの合宿に参加することが出来、その恩に気付くことが出来ましたが、この合宿に参加した私たちの責務は国民全体に「恩」を知らせることだと思ひます。

淡路島に集ひて友と詠み歌ふ時の終りて心さびしき

御製に驚き、感動した

（拓殖大学　政経　二年　大貫大樹）

今回の合宿もとても充実したものとなり、良い体験が出来たと思います。どの講義も聞き入ってしまうものばかりでした。一つが一日目の武田有朋先生のお話された後藤新平のお話です。後藤は私の大学の学長を務めた事もあり功績については知っていました。しかし、彼が実務的行政を行うその背後にも皇恩、国恩を常に思い、この恩に感謝する事を考えていたという事は自分の知らなかった事で、感動し、その伝統が受け継がれた大学に在学している事をとても嬉しく思いました。

もう一つが小柳左門先生の明治天皇の大御心についての講義です。特にこの中で紹介されていた後水尾天皇の御製の中でお怒りになるのが当然で秀忠の不敬であるにも関わらず、

それでも自分を律するお姿が詠まれていて、とても驚き、感動しました。明治天皇の御製でも同じようなお姿が表れ、加えて国民を想っておられる事を改めて痛感しました。このような歴代天皇のお姿を見ると、豊かな感性を持たれたお方であり、まさに「現御神」であると私は思いました。そのように国民を想っておられるという皇恩に、我々国民は後藤新平や多くの明治の先人のようにお応えし、奉公しなければと思います。

学生発表後山内健生先生とお話しして

温かなお言葉頂き感極まり嬉しさのあまり隠れて涙す

自分の理想を問はねばならない

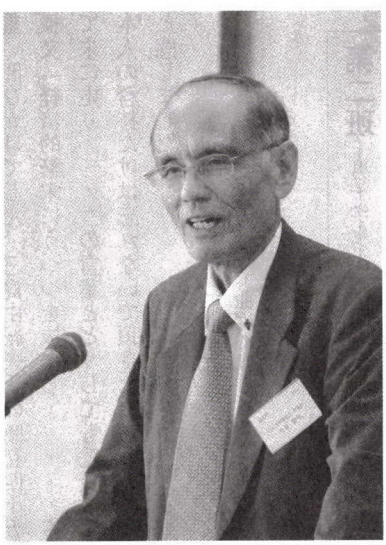
（興銀リース㈱　小柳志乃夫　58歳）

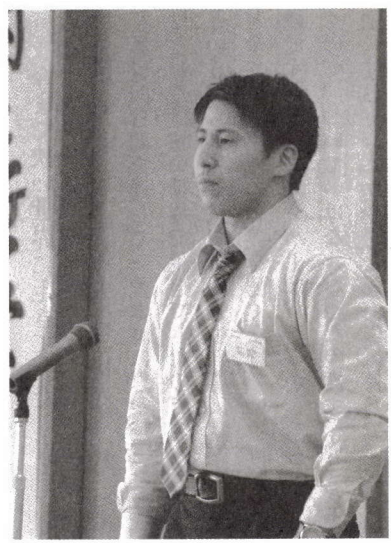
講義内容はいづれも見事で有り難く拝聴しました。武田有朋君の講義も清新でした。

班長としてどこまで班員をリードできたかは自信ありませんが、今後もつきあっていける素地はできたと思ひます。

個人としては、当班に回ってこられた中西輝政先生が理想を持ちなさいと学生に説かれてゐたことが、自分に向けられた言葉のやうに思ひました。現実生活の中で流されがちでありますが、その中で自らの志如何、自らの理想如何を問はねばなりません。

廣木寧運営委員長、まことにご苦労様でした。来年は伊藤





開会式。合宿教室は福岡大学三年岡部智哉君（右）の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長（左）は、現在の国内外の諸問題に対し、他人事ではなく自分の目で見て感じて自身の事として考へる力を身につけてほしいと述べた。

俊介君が運営委員長とのこと。有り難く、側面から応援して参りたく存じます。

慰霊祭にて

中秋の名月を明日にあかあかと夜空を照らす月の影かな
右手遠く海のあなたに徳島の町のともし火きらめき連なる
左手はるか暗き沖合にぼんやりと光るは船か灯台ならむか
先輩の高く澄みたる朗詠の声にはじまるみたままつりは
亡き友のみたまも今か降りまさむと思ひつ深く頭をたれぬ
しりへには波の音たかくおかよりはすだく虫の音いよいよしげし

中西輝政先生のご講義に衝撃を受けた

（㈱MCエバテック　天本和馬　64歳）

中西輝政先生のご講義に衝撃を受けました。先生のご講義は「日本を取り戻す」意味を問ふものでしたが、巷間言はれてゐる意味ではなく、領土問題や歴史観に横たはる私たち自身の心の気概を問はれたやうに感じました。

特に白洲次郎の言動の変遷に触れられ、憲法制定直後の「今に見ておれ」との憤懣やるかたの無い憤りから、戦後復興が進みもはや戦後ではないと言はれる時代に「豊かな日本になり結果的に日本国憲法はよかった」との言葉に、先生は「豊かさに負けた」と看破されました。この先生のお言葉は私たちにもいろいろな意味で厳しく問はれた言葉と受け止めました。私たち自身が豊かさに負けてゐないか、豊かさの中で日本人としての矜持を失ってゐないか。心にズシリと響く重い問ひかけでした。三島由紀夫氏の昭和四十五年の事件の檄文「経済的繁栄にうつつを抜かし‐‐‐‐‐本を正さずして末に走り‐‐‐」の言葉とどうしても重なってきます。日本人の矜持だけは忘れないで頂きたいとの先生の切なる思ひと感じました。

中西輝政先生のご講義を聞きて

豊かさに負けて己の心まで曲げてはならじと諭し給へり

第二班―男子学生―

今まで狭い世界に生きていた

（中村学園大学　教　一年　太田鴻平）

私は四日間を通して一番素直に思ったことは、「今まで自分はどれだけ狭い世界で生きてきたのだろう」ということです。というのも、私は武田有朋先生の導入講義をはじめ、ほとんど全ての先生方の講義を聴くだけでいっぱいいっぱいだったのですが、班のメンバーは、そこから話をどんどん広げていくので、ついていけなくなったのです。もっと本を読んで勉強しておけばよかったと後悔の気持ちでいっぱいでした。

しかし班のメンバーは、私がついてきていないのをフォローしてくださったり、将来の展望へとつなげて話していた

だいたので、私自身将来のことを考える上でとても勉強になりました。

そして、この合宿で多くの短歌に触れ、難しい言葉を使っている歌や、読み手の想像力に働きかける歌などがあり、自分も感動をこのように歌にしたいと思いました。

四日間共に過ごしてきた友に感謝の気持ち心にあふる

三井甲之先生の道統に連なる喜び

（國學院大學　神道文化　二年　横川　翔）

参加は今回が初めてです。合宿を通じて、講義などで三井甲之先生のことがよく触れられていたことに感動しました。

私は高校生の時から三井先生をはじめとする諸先生のことを勉強しておりまして、合宿の折々に講師の方々が三井先生のことをお話しされているのを見ますと、「ああ、まだ三井甲之という大思想家は生きているんだ！」と深く感銘を受けるのです。亡くなった後も語り継がれるさまを目の当たりにし、感激ひとしおでした。

三井先生、黒上正一郎先生、これらの同信につらなる諸先生の精神を継承しようとしている団体は日本全国を探しても国文研だけではないでしょうか。

この度、このようにして機縁を得ることが出来ましたのは幸運でした。

吾が師とぞたのめる三井大人のうたみたままつりによまれたりけ

オリエンテーション。廣木寧合宿運営委員長（右）は、この合宿で、自分自身に語られてゐると思へるやうな言葉や文章に出会ってほしいと語りかけた。古川広治合宿指揮班長（左）は、合宿生活を営む上での諸注意を説明された。

り

世に迷ふ吾等に奮起を促せる大思想家の御文かしこむ

短歌創作の心得を学んだ

（京都大学　工　二年　安永知生）

今回の合宿は昨年の厚木合宿に引き続き二回目の参加となりました。

短歌創作を受けての全体批評の時間では、去年に続いて今年も私の短歌が取り上げられ大きく訂正されたことが最も心に残っています。

班別の短歌相互批評では、自分の思いを伝えたところ、私の歌には感動の焦点が二つあり、想起するときの雑さを感じる、と指摘されて、なんとなくですが短歌創作の心得というものを実感することができました。それと同時に天皇陛下が御製を詠まれることの大変さを肌で感じ、非常に良い体験をすることができました。

短歌創作について

先生方に自分の雑さを指摘され創作心得を強く感じけり

歌に込めた自分の思いが相手に伝わった

（明星大学　情報　四年　岡松　優）

私は今回三回目の参加になります。今回の合宿では万葉集の防人の歌や天皇の御製がとても印象に残りました。

防人の歌には素直な思いが表現されており、心に染みわたりました。また、明治天皇の「千万の民とともにも楽しむにます楽しみはあらじとぞおもふ」という御製を聞いた時、国民の事を本当によく考えておられるのだな、大切にされているのだなと感じました。他にも全国各地を行幸されて詠まれた歌に感銘を受けました。

今回、鳴門の渦潮を見学した折に、私は波の音を聴いて心が安らぐという内容の歌を詠みました。班別相互批評の時、班員の一人が「気持ちがすごくよく伝わる」と言ってくれ、自分の思いが相手に伝わることがこんなにも素晴らしいものなのかと感じました。勉強不足で難しい言葉も知りませんが、歌を詠むことはいいことだなと感じました。

先人の心に響く歌を読み生きるあかしが見えてくるなり

国の危機に自分だけ逃げ出すことはできない

（京都大学大学院　人間・環境　二年　渡邉大士）

私がこの合宿でまず印象に残りましたのは、皆さんの元気の良い挨拶です。「おはようございます」「よろしくお願いします」の大きな声に勇気づけられました。挨拶をおろそかにする風潮のある昨今、とても感銘を受けました。

講義では中西輝政先生の他に、國武忠彦先生の御講話を興味深く拝聴しました。「戦争になったら他国へ逃げ出す」と

答えた若者の話に開いた口がふさがりませんでした。その後の小林秀雄氏のエピソードに感動しました。文学者である以前に一人の日本人たらむとする小林氏の覚悟に賞賛を贈りたくなりました。

私たちは一人で生きているのではありません。今日の私たちがあるのはこの日本の国のお陰であります。それなのに、国の危機に際し逃げ出すとは、恩を仇で返すことに他なりません。私を生かしてくれている日本に感謝し、国のため、ひいては世界のために精進していきたいとの決意を深めました。

己が身は自力にあらず他力にて生かされたりとただ感謝する
恩受けし御国の危機の来りなばこの身を捨つる覚悟なりけり

学生諸君の心に踏み込み足りなかった

（平山直樹税理士事務所　北村公一　47歳）

久々に参加させて頂きました。

日頃の勉強不足、人付き合ひの浅さがたたり、学生班班長としての務めを十分に果すことができず、申し訳なく思ひます。

懐かしいお顔との幾つもの再会は嬉しいことでした。

運営、事務の皆様、先生方、お世話になりました。有り難うございました。

見上ぐれば雲間に円き月かかり御霊祭りの始まらむとす

カメラ・レポート4

合宿導入講義。ＮＴＴ西日本㈱　武田有朋先生は、後藤新平が繰り返し述べてゐる「皇恩・国恩」といふ言葉に今上陛下の御製を紹介しつつ、国民が心の拠りどころとして陛下を戴けることのありがたさについて自らの所感を述べ、天皇の御存在についてぜひ班員でじっくり語りあってほしいと語られた。

第三班―男子学生―

日本の国柄を感じた

（長崎大学　教　二年　橋口佳生）

どの先生のご講義も感動的で面白く、そして勉強になるものでした。なぜこんなにも胸が熱くなるのか。それはまさに、先生方が、先人の詩と哲学にあふれた歴史を語って下さったからだと思ひます。中西輝政先生のご講義を拝聴して、これだけは日本国家として守らなければならない価値は、皇室を戴いてゐる日本の国柄、民と天皇の心のつながりだと思ひました。小柳左門先生は明治天皇のお歌を紹介されながら、その大御心を切実に語られました。明治天皇は常に国民のことを思はれてゐたのだなといふことを陛下のお歌を拝誦する中で感じました。ここに私は日本の国柄を感じたのです。中西先生は、国民一人一人が歴史観を取り戻すことが今後の最重要課題だと仰いました。私はもっと明治天皇について学び、お歌を偲ぶ中で日本の国柄を感じていきたいと思ひます。

合宿を振り返りて

先人の短歌（うた）と言葉にあふれたる歴史語れりますらをの師は

内外に迫りてきたる国難は日本の民の心の危機なり

先人たちの残した言葉や詩に向き合うこと

（立命館大学　文　三年　藤新朋大）

「詩と哲学」という言葉が一体何のことなのか、合宿当日まで分からなかったが、合宿の中でやっとその意味に思い至ることができたと思う。

「歴史」という大きな流れの中で最も重視されるのは、後世に残した「事蹟」である。例えば「織田信長は足利幕府を倒した」であったり、「初代内閣総理大臣は伊藤博文である」などのそれである。その「行動」自体がその人物を現すと説明できるかもしれない。しかしそれには内面がはっきりしないという意味で限界がある。その内面、こころ、考え方を知る（知ること自体の意味を問われると難しいが）ためには、その人物と対話、即ち、残した言葉や詩、和歌に向き合うことが必要なのではないだろうか。そういう意味としての「詩と哲学」を考えるきっかけとなった合宿であった。

閉会式の学生代表挨拶を拝命して

昨年と同じ立場となりたれど今年の我は成長したるか

日本を取り戻したいと再確認できた

（専修大学　経営　三年　芦田和久）

中西輝政先生の御講義において、今、私達が終戦七十年に向けて日本の歴史問題に如何にして取り組み、また取り戻し

てゆかねばならないかを再確認しました。

國武忠彦先生の御講義で「昨今の若年層の中に『日本が戦争になったら逃げてしまえば国家間の戦争は起こらず、それでかまわない』などというある学者の意見に賛同する者が多い」との話を聞き、何と情けない、自分が良ければ構わないという恥知らずな人種になってしまったのか、また、私もそれらの若い世代の一人だと思うと悔しくてたまらなくなりました。私はこの数年間、首都圏学生が斎行する慰霊祭に携わり、その都度、あの方々に背を向け、先人を辱める生き方はしたくない、出来ないなと感じてまいりました。戦後七十年を迎えようとする今日、先人の想いを歪め、辱める米国の作った憲法と歴史を何としても変え、日本を取り戻したいと再確認できた合宿でした。

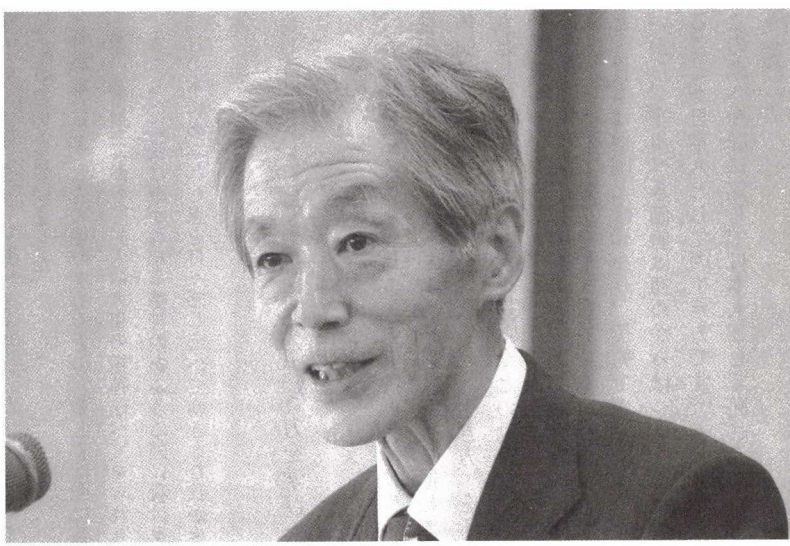
日本を取り戻さんとの想ひ持ち首都圏内に波を起こさん
吾が想ひたとひ小さき波なれど友ら集ひて大渦とならん

班別研修で身が引き締まる思いがした

（早稲田大学　法　四年　有坂真太郎）

班のメンバーはそれぞれ改憲論議や歴史認識などの社会問題と向き合い独自の思考を深められていた。皆さんとの議論では感心させられると共に、自分も頑張らなければならないと身が引き締まる思いがした。國武忠彦先生がご講義で社会学者の古市氏の文章を引用しつつ「戦争があろうと祖国がど

カメラ・レポート5



古典講義。元富山県立富山工業高校教諭 岸本弘先生は、防人の歌について書かれた黒上正一郎先生の「あるがまゝの人生を戦ひ生くる悲喜の情意である」云々のお言葉に、詠み人の心をしみじみと偲ばれ、防人の別れの心を追痛みて歌った「大伴家持の長歌」を朗々と暗誦された。

うなろうと知ったことではない」「自分さえ生き延びられればいい」といった気風が若者たちの間で拡がりつつあると指摘されたが、そのような無責任さからほど遠い、社会と向き合い自らの責務を全うしようとする人々が確かに存在すると、班別研修を通して確認することが出来た。この合宿教室のような日本の将来について真摯に考え、議論し、実践する若者たちがともに練磨し合う試みを重ねていくことで、言論や思想の退廃という現状を変えてゆけるかもしれないと思った。

合宿の友らと語らむ一心に日本の憂ひを吹き飛ばさんと

「恩」を感じたときに力が湧いてくる

（福岡教育大学　教　四年　前川大基）

明治天皇の御製や後藤新平の具体的な姿から、ここに日本人のあるべき姿を感じました。そしてなぜそこまで責任を背負えるのかと考えた時、「恩」を強く感じているところにあるのではないかと思いました。皇室の恩、先人の恩、日本の恩を心から感じ得た時に、力がわいてくるのだと思います。この恩によってつながれていることは非常に温かく有難いことと思います。僕自身は恩を感じることはありますが、常に持つのは難しく、そこに力を見いだせる時は少ないです。しかし、大切なことであるとこの合宿で感じました。まず自分自身が様々な「恩」を感じるために先人の言葉を拝誦したり、親や友人の存在に心を寄せていく毎日を送り、自らの生き方を変えてゆくことから始めていきたく思います。そして教育を目指す者として、「恩」を感じ、生き方を省みる教育をしていきたいと思いました。

日の本に生きし先人等やすめろぎの言葉と姿は今に残れり
言の葉と姿におきて先人は大和の精神伝へてをられり
とこしへに受け継がれたる精神のあふるる国に我はをるなり
日の本にあふれし恩を日々感じ応へてゆきなむ我が生き方で

日本人としての価値ある生き方を学びたい

（㈱IHIエアロスペース　内海勝彦　59歳）

今年の合宿のテーマは「先人の詩と哲学に生きるあかしを見出さう」だったが、ご講義や班別研修を通して、それは具体的には、先人の遺した〝歌〟と〝生き方〟を学んで、日本人として恥しくない人生を送らうとの励ましであると思へた。中西輝政先生は御講義の中で「正しいもの、美しいものを見る目。それは日本人として独特のものがある。これを守ること。日本は他国とは異なり、契約で成り立ってゐる国ではないから、守るべき価値は初めからはっきりとある。それを知ることが日本人としての生き方です」とお考へを披瀝された。この教へを肝に銘じて日本人として恥しくない生き方をしてゆきたい。

廣木寧合宿運営委員長に
三年の長きに亘り運営の長果されし労き偲ばゆ

福岡ゆ賜びしメールの数々に学生との交ひ目に浮かびけり
日の本の正道伝へんと若きらを導き給ふ姿尊し

正しい歴史認識を日本人自身が実現せねばならない

（中島法律事務所　中島繁樹　66歳）

廣木寧運営委員長のさはやかな、かつ適切な運営指導は良かったと深く感謝する。四日間の日程は無理なく充実してゐたと思う。

中西輝政先生の講義の内容は、正確に問題の焦点をとらへてゐた。戦後六十九年を経た今日、いま日本人がしなければならないことは、昭和三年から昭和二十年に至る十七年間において日本が直面した困難事を過不足なく理解することである。この歴史認識を日本人自身が実現し得なければ、これからも日本は、国際関係のみならず国内政治においても漂流を続けることになるであらう。

岸本弘さんの万葉のますらをたちの歌のお話は感動的だった。朗々と延々と大伴家持の長歌をそらんじて唱へられたことは衝撃的な驚きであった。万葉集を読むといふことの本当の態度はかういふことなのだ。

万葉のむかし家持詠みしとふ長歌を大人はそらんじ唱ふ
防人のつらき別れをいたむとて長歌詠みたりかの家持は

カメラ・レポート6

短歌創作導入講義。元㈱アルバック北濱道先生は、『短歌のすすめ』から、有限の命を何か永遠のものにつなぎたいといふ気持ちが短歌といふ形式に生命を吹き込む、本当にまごころを詠んだ歌は必ず人の心に響いてくると説かれた。

第四班 ―男子学生―

短歌の素晴らしさを再認識して

（靖国神社崇敬奉賛会青年部　相澤　守　25歳）

今回の合宿では多くの和歌に触れることができたが、和歌はその人のその時の気持ちや感動が三十一文字に込められている。これは先人の詠んだ和歌でも同じである。従って、和歌によって他者の気持ちや感動を追体験し、それを共有することができる。

私は今回、短歌を通じてこのような日本文化の素晴らしさを改めて実感することができたが、その短歌を学ぶことは「単なる知識の習得ではない」と言うことがよく分かった。

大学の学問では良く客観的に物事を分析することを求められるが、それとは違う感動を伴った学問があることを、今回の合宿の中で再認識できた。従って短歌に触れることは単なる文化の継承に留まらないことであると私は考える。

この先人から受け継がれてきた短歌を、これからも詠み、そして先人が詠んだ短歌にも触れていきたいと思う。

帰り道明石海峡大橋を渡る
今まさに大橋渡り離れゆくあまた学びし淡路の島を
淡路離れ合宿の日々も思ひ出とつひになりけり名残惜しくも

万葉の短歌に見る日本の価値・精神を引き継ぐ

（福岡教育大学　教　聴講　山本泰之）

私は、今合宿に、短歌をより深めたい、また今の教育問題、日本の問題についての視座を得たいと思い参加しました。その中でまず、短歌に詠まれた言葉の深さ素直さを、万葉の柿本人麿、防人達の短歌、そして明治天皇御製から感じました。

特に小柳左門先生から、「古代の歌人は一つ一つの地に神が宿っていることを信じ、神々や大切な人のことを言祝いでいた」との言葉と、「明治天皇様の御製は深い内省のこもった中で御自らの御実感として詠まれている」との言葉に、先人達のそれまで気づかなかった祈り、ありのままなる気持ちの吐露が伝わってきました。

もう一つ印象に残ったことは、國武忠彦先生が仰られた「自分のこととして思う」との言葉です。現代の状況等を紹介して戴いた時、衝撃を受けると共に、自らにも当てはまることがあると思いました。そしてこのことをいかに考えるかと思った時、班別研修で中西輝政先生から「大学時代、日本の価値・精神について、これだけは譲れないと言うものを持ちなさい。」と言われたのが思いおこされました。

私は将来、教師を目指していますが、今、教育では様々な問題があります。

そのような現場にあっても力強く、日本の精神を表す先人の詩と姿を伝えていける自分でありたいと思い、その為にも

今、学生として、一人でも多くの友に語り、更に深く己のことを見つめ直し、そして日本のことを学び、行動に移さずにおれないものを宿していきたいと思います。

四日間、誠に有難う御座いました。

あまたなる大人の積まれし精神を我も同じく踏み行はむ
さまざまに形をかへて我が目に移りたるかな白き雲々

自由発表の折に

ともどちの立派な発表聞きたれば発表できぬは悔しかりけり
壇上で発表する言葉のまとまらぬ我の力不足痛感されたり
もう一度合宿におもむき我思ひ集ひし友らに発しゆきなむ

中西輝政先生の講義「日本を取り戻す」の真意について

（福岡大学　経　三年　岡部智哉）

今回で二度目の合宿でした。前年度にも増して非常に充実したものになったと共に、講義に於いてはどの講師の方々を思い返しても胸の熱くなる内容ばかりであり、班別研修に於いても互いの意見・感想を暖かな目で、また時には真剣な眼差しで行うことが出来て、私自身多大なる刺激を戴くことができました。

特に印象に残った講義を抜粋致しますと、中西輝政先生の「日本を取り戻す」と言う講義でありましょう。現代日本に慣れ親しみ、現在の環境に満足してしまっている現状があると仰られていました。戦争など起こるはずもないと感じてい

カメラ・レポート7

野外研修（鳴門渦潮船上散策）。短歌創作をかね参加者は、船上からの瀬戸内の小島の眺めに見とれながら「鳴門の渦潮」見学に向った。写真は途中の小島。

る若者は大多数を占めるでしょうが、それが改めて本当の意味での日本の危機と言うことであると考えさせられました。

合宿の終りを迎へ
曇りなき淡路の地にて終りゆくまた来年と友と誓ひて

中西輝政先生へ質問して

（京都大学　経　四年　山内　遼）

今回の合宿教室は昨年に引き続き、二回目の参加となりましたが、数々の講義、討論に大いに満足致しました。

特に御講演を戴いた中西輝政先生に対し、自国の歴史観については海外にも受け入れ易いよう、国内向けと海外向け発信とで、ある程度ダブルスタンダードな姿勢を持つべきではないかと御質問したところ、「歴史観等の国の根幹に関わるものは例え摩擦を生むとしても、正しいと考えることは一貫した主張をし続けるべきだ。アメリカをはじめ多くの国々は、それを繰り返し主張すればその違いを認めてくれる時が来る。」と仰られ、とても新鮮に感じました。そして、それに関連して、私たち若い世代へのメッセージとして「胆力を持って、正しいと思うことは恐れず貫いてみよ」との激励も賜って、自らへの戒めとして身の引き締まる思いが致しました。

また、班員と話をする中に於いても、自らの問題意識を日常の中で既に行動に移している学生も多く、他者に自分の思いを積極的に友人に伝えたり、将来の職業に対しても、具体的に自分がすべきことをイメージできていたりと、自分も見習わねばならないと思える人達に出会えたことは大きな収穫でありました。

いざ回れ回れ回れと眺むれどどうにも回らぬ大風車かな

小柳左門先生の御姿と慰霊祭に感動して

（早稲田大学　政経　三年　北林裕教）

今回、合宿に初めて参加させて戴き、私なりに感動したことが二つある。一つは、我々は歴史を奪われているということ、それを取り戻さねばならないと言うことである。

私は平成の生まれで、所謂戦後教育の中に浸って生きてきた。それ故に、我々が歴史を失っている、奪われていると言う実感は非常に薄い。しかし、今回、小柳左門先生の御講義、「明治天皇の大御心を仰ぐ」の中で、小柳先生が涙ながらに今上陛下の御製を紹介される姿を見て、非常に衝撃的に感じると同時に感動した。

小柳先生の御姿に私は歴史を取り戻すとは、こう言う御姿のことを言うのではないかと強く感じると同時に、私もそう言った経験をして見たいと思った。

二つ目は、慰霊祭である。この慰霊祭では潮騒が非常に印象的で、祭文奏上の際に、先生が祭文を述べておられる間、潮騒が一層大きくなった様に感じられ、英霊の方々の御霊がそこに在ると言うことを感じた。

その際に、我々はこの方々にしっかりとお応えしなくてはならない、と言うよりは、お応えしたいと言う思いが高まってきて、自然と頭を下げている間、「ありがとうございます。我々が次をしっかり引き受けたいと思いますので、御安心下さい。」と言う様に念じることができた。

今後、英霊の御霊に御誓い申し上げたことを、しっかりと御霊の御意思として継いでいきたいと思う。

小柳左門先生の御講義の御姿を見て

師の君は天皇の御姿を涙流して語り給ひぬ
師の君の涙ながらに語らるる姿に我も胸の迫りぬ
我もまた師の君の如く古の人らのことを伝へゆきなむ

慰霊祭にて

祭文を上げらるる最中潮騒の不思議と大きく聞えきたれる

淡路の地での合宿に学生班班長として参加して

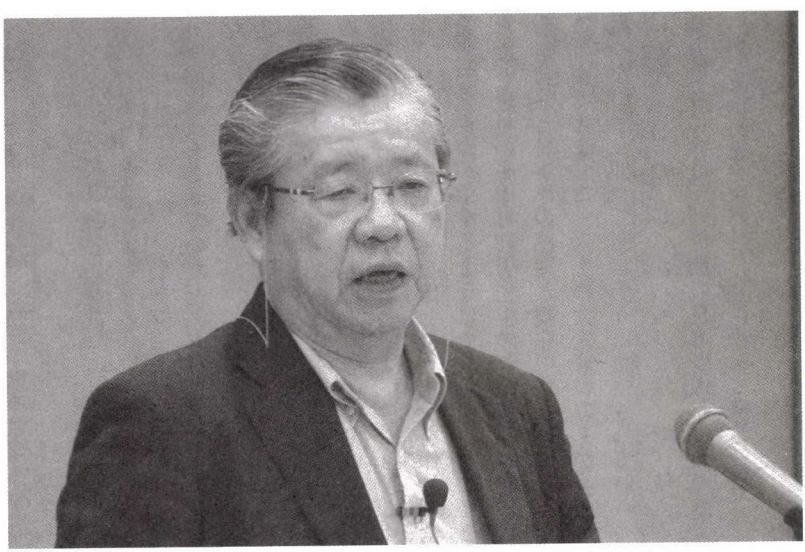
（折尾愛真短期大学　松田　隆　58歳）

正直に言って、今回は若人達の班長を任ぜられ、夜も十分に眠れず今までの合宿で一番疲れましたが、それ以上に今までの合宿の中で一番感動も大きく感じております。

最初の一日目から、四日目最終回の廣木寧運営委員長の御挨拶まで、ずっと心の中で涙が止まらない状態でした。

淡路での合宿は初めてとのことだそうですが、その合宿に参加することができたことは私の人生にとって宝となる体験

カメラ・レポート8



京都大学名誉教授中西輝政先生は、「日本を取り戻す」とは「領土を取り戻す」、「歴史を取り戻す」、「自主・主権・独立を取り戻す」の三点であるとされ、「敗戦最露出」の憲法に涙した白洲次郎氏にして後に経済的繁栄から憲法観を変へた「豊かさの悲劇」があり、憲法は国の主権そのものの核心的価値であり、一日も早く自主憲法を取り戻さなければならないと強調された。

となりました。誠に有難う御座いました。
来年も皆が合宿に参加できることを祈っております。

合宿の慰霊祭にて

波寄する淡路の浜の空高く照る月清く明日は十五夜

地区別懇談にて

若人のまなこかがやく姿見て我の心も新なりけり

良き学生に巡り合ひ更なる広がりを期して

（熊本市役所　折田豊生　63歳）

少人数が故に内容の充実したいい研修だった。
班付の必要性がない程に学生諸兄の積極的で真摯な取組みには、むしろこちらが学ばされる面が多々あったやうに思ふ。
良きメンバーに巡り合ったことを有難く思ってゐる。
願はくは、この後、それぞれが悠久の歴史に繋がって、生きてゆくべく、永き交はりを結び、その交はりの更なる広がりを共に期してゆきたいものと思ふ。

それぞれに務めゆくべきことどもを語る友らのまなこ涼しき
み国今ただならざれば心して学び合はなむのちの日々にも
なづむ日のあらばたちまち呼び交はし呼び交はし勉めむこの日々
忘れず

第十一班―女子学生―

教育の大切さを実感

（㈱ファミリーマート　金澤仁子　30歳）

今回班長をさせていただいき、本当に有り難かったです。学生の心が180度変わっていく様を間近で見て、教育の大切さを実感しました。それとともに自分の教育者としての力不足も感じ申し訳なく思いました。班員達は日本、ご皇室へのイメージが改善され、歴史を勉強していきたいと言ってくれていますが、まだ大きな火にはなっておりません。班別研修でもっと個々が意見を出し合う空気を作り、全体感想自由発表で全員が挙手するようにできなかったことを悔やみます。ただ、班付の小田村初男先生のご指導は本当に素晴らしく、皆が自然と日本への感謝と現在の日本のおかしな点を感じることができました。人生の大先輩の方々が「まだまだ学びが足りない」と仰って楽しそうに勉強されていらっしゃる背中に感動しました。これからもっと学んで、使える力、教育する力を身につけて、後世の日本がより良くなるよう励みます。

美しき国の歴史を教はれば皆に伝へて幸せ分けたし

日本の心に気づけて感謝

（熊本県立大学　総合管理　四年　井上裕紀子）

今回始めて合宿教室に参加するなかで最も印象に残ったことは、中西輝政先生の御講義です。私は卒業論文での題材として政治問題の渦中にある領土問題や歴史問題等を考えており、その上で文章を書く際のバックグラウンドにできたらと思いながら聴講させて頂きました。お話を聞かせて頂きながら、自分の中にある意見を裏づけるような事実や時代背景を教えて頂き、また「日本を取り戻す」ということについて、領土・歴史・自立などの複数の観点からみる視点をもつことの必要性を改めて知ることができました。そして一番身に染みて感じたことは、日本人が、日本の国柄、心というものを取り戻すことです。自分はまだまだそういった意味での心が足りていない、ということに気がつきました。気付けたことにありがたく思い、もっともっと先人の方々が何を思って生きていたのかを学びたい、という思いに駆られました。

防人の和歌に溢るる忠義心今こそ祖国に欲せらるるかな

明治天皇のイメージが180度変わった

（西南学院大学　経　三年　宮田麻央）

今回、この合宿を寺子屋モデルさんの山口秀範社長からお話を頂いた時に、歴史が苦手でとても不安な気持ちの方が強

中西輝政先生はご講義の後、班別研修に顔を出され、学生の質問に丁寧に答へられた。

かったです。しかし、班別研修での小田村初男さんの話や金澤仁子さんや学生との話し合いの中で分からないところは共有し、内容を説明して下さり、自分のもやもやもすっきりとした気持ちになり、とてもよい時間で貴重なものとなりました。

私は今まで天皇に対する思いや関心もなく、何をしている方なのかも正直わかっていませんでした。しかし小柳左門さんの明治天皇の話などで今までの自分のイメージだった天皇の姿というのが１８０度変わりました。明治天皇がおられたからこそ今私たちは生きているのではないかと思いました。

歴史から背を向けないで、愛国心をもつことに誇りをもって、これから生きていけたらいいなと思います。私たち若者が継いでいかなければならないと思いました。

慰霊祭ますらをのいのちをむだにせず和歌に朗詠す波に現はる

天皇陛下の大きな愛

（筑紫女学園大学　文　三年　山崎春佳）

今回の合宿で日本人として、どう生きるべきか学ぶことが出来ました。合宿が始まるまで、歴史が苦手な私が、お話を聞いて理解できるのか、まして班員と意見を交すことができるのか、不安しかありませんでした。しかし、いざ始まってみると、明治天皇、昭和天皇、今上天皇の国民を想うお姿に感銘を受け、今の日本が存在しうるのは、天皇陛下のおかげだと気付くことが出来ました。そして、日本は天皇陛下の大きな愛で包まれているのだと思いました。短歌創作では相手に想い、感動を伝える難しさを痛感しました。その中で、感動に対し素直になること、ありのままを表現することの大切さを学ぶことができました。これからは、歴史から逃げるのではなく、一日本人として日本の未来について意見できるよう、勉強に励んでゆきたいと思います。貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。

志高き友らと語らひて古人のために生きると誓ふ

同世代の方の熱心さに圧倒された

（佐賀大学　文化教育　二年　西山寛子）

この合宿で私は同世代の方の日本という国に対する熱い思いに圧倒されました。講義や班別研修を通して日本の歴史にふれ、語り合うことで、その熱心さに驚くとともに、自分が日本について何も知らないのだと気づきました。自分の無知をはずかしいと感じたのは初めての感覚でした。

私は今大学で教育について学んでいます。はずかしながら今回の合宿で初めて日教組の存在を知りました。その他にも、日本国憲法の中身やなりたち、天皇の和歌、戦時中の指揮官の思いなど、もっと学びたいということを沢山見つけることができました。世の中には日本の歴史に対する様々な見解があります。今の私には一つの思想に寄せることはこわくてで

きません。しかし、この合宿を通して得た観点やたくさんの疑問を勉強して、自分なりに深め、教師になった時に日本に対する自分の思いを語れる大人になりたいと思います。

合宿で学びしことを語る目にまぶしさ感じ我も学ばむ

若い人達の真剣に学んでいく姿に感動

（元皇宮警察本部長　小田村初男　64歳）

今年も合宿が終ってみれば、短く感じてゐる。メインテーマとして中西輝政先生が「『日本を取り戻す』とはどういふことか」について御講義なされ、戦後日本が奪はれた領土、歴史、自主・独立（憲法）を取り戻さなければならないこと。その為には日本人の精神・心を取り戻さなければならない事を具体的にお話下さり、改めてよく理解することができた。

そして他の講師の先生方が、日本人の心について先人の詩と哲学を様々な面から具体的に示されながら講義をされ、合宿全体として、大変まとまりのある構成で理解を深める事ができた。

また、女子学生班の班付を勤めたが、若い人達が真摯に講義や班別研修に臨み、真剣に学んでいく姿に感動を覚えた。

奪はれし日本の心取り戻すことの意義をぞ師は語りかけぬ

師の君の熱き想ひのこめられし御言葉聞きて身引き締まれり

カメラ・レポート10

合宿三日目。「明治天皇の大御心を仰ぐ」と題し特定医療法人・原土井病院院長　小柳左門先生は、私達のこの国で神話の昔から受けつがれたかけがへのないもの、それが皇室の御存在で、しかもただ続いてきたのではなく、代々の天皇様が並々ならぬ思ひで国民の平安を祈られた御努力と、それを無言のうちに感得した国民の真心とのふれあひによる賜物であらう、と語られた。

第十二班―女子社会人―

国家観をなくした若者達の覚醒が急務

（難波江紀子　79歳）

國武忠彦先生の御講話によると、最近ある社会学者が「戦争が若し起っても逃げればよい」と若者を煽っているという。このような国家観を全くなくした若者達が増えていくことに危機感を覚えると共に、国を大切に思う意識の覚醒が急務であると強く感じさせられた今回の合宿教室であった

岸本弘先生の防人の歌（万葉集から）、そして朗々と語られたお姿に尊いものを感じた。

小柳左門先生は明治天皇の御製、今上天皇の御製のほか、明治天皇と乃木大将とのことをお話しくださった。特に心打たれ涙が出たのは、日露戦争後、明治天皇はこの戦いで二子を失くした乃木大将に思いを馳せられ、「寂しいであろう。今後は沢山の子供を乃木に与えてやりたい」との大御心から学習院の院長にと仰せられたこと、初めて聞くことであった。

中西輝政先生の御講演で日本には御皇室という世界に類のない尊い守るべきものがあることを明快に御教示くださったことを嬉しく思いました。

淡路にて國の行末守らむと誓ひし心あだ忘れめや

一番の感激は鳴門の渦でした

（華泉書道会　坂本和代　63歳）

淡路島の合宿に参加させていただき有難うございました。

一番の感激は鳴門の渦でした。太平洋と瀬戸内海の海面の高さが違う・・・今まで見たことも考えたこともなかったです。帰路の船上から見た霞のかかった山々に見とれてしまい和歌創作を忘れてしまいました。

先生方の講義は、みな「そうだそうだ」と納得しながらも、毎年家に帰ると、日常の生活に戻ってしまいます。私に出来ること、書道教室に縁のある小・中学生にこの合宿で勉強したことを伝えたいと思い乍ら、まだ消化不良で十分に伝えられません。少しずつでも歴史、偉人を伝えて行きます。

ありがとうございました。

慰霊祭にて

鳴門海（なるとかい）も英霊たたえ荘厳に調べ奏でる寄せくる波は

先人の御心を生かして日々精進していきたい

（内山慶子　62歳）

四日間皆様に大変お世話になりましてありがとうございました。イザナギノミコト・イザナミノミコトが最初にお生みになった淡路島での合宿、美しい海と美しい空、そして清しい空気と、楽しい四日間でした。

「先人の詩と哲学に生きるあかしを見出そう」のテーマのもと、多くの御製やお歌を教えて頂き、その中に日本人としての哲学があり、その短歌に詠まれているお心をお手本にと毎日の生活を精進していきたいと思います。

学んだものを生かし、またさらに学び、生かしていく努力をしていきます。

そして、「やっぱり日本人として生まれて良かった」と想う場面を沢山作って行きたいと思います。

美しき淡路の島にて学びたる先人の御心生かして行かむ

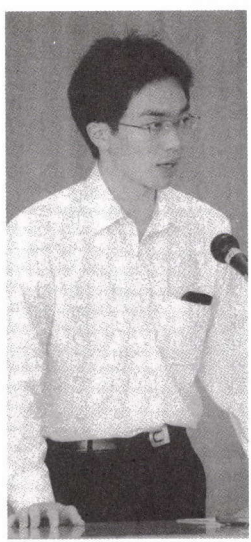
祖国に関する学びを深めることができた

（日本語教師　鈴木のり子　51歳）

大変充実した時間を過ごさせていただきました。

今回の合宿では、中西輝政先生の御講義からは、一国の存続にとって国土（領土）・歴史・自主独立（憲法）がいかに大切であるかを、また小柳左門先生の御講義からは、日本の精神的な危機に際し、明治天皇がいかにみずからの御決意をもって国柄を守る支えとなられたかを、特に印象深く学びました。さらに班別研修では班長の導きのもと、班員同士お互いの考え・思いを率直に語り合うことができ、かけがえのない祖国に関する学びを深めることができました。ありがとうございました。

交通の不便さはありましたが、鳴門の渦潮、吹上浜の朝の



学生発表。福岡大学経済学部四年小林拓海君（写真右）は、「福大寺子屋塾」で平泉澄先生の『少年日本史』の「大東亜戦争」を読み、黒木博司海軍少佐の愛国心を知った感銘を、拓殖大学政経学部二年 大貫大樹君（写真中央）は、昨年の夏季合宿の慰霊祭に参列した折の感動を、京都大学経済学部四年山内遼君（写真左）は、古典に見出す偉人の姿を通して自らの今の心を顧みるといふことの大切さを学んだ体験を、それぞれ語った。

集い、慰霊祭なども、大変美しく印象深いものでありました。

清き波寄する響きも静かなる吹上浜の美しきかな

祖父からの思いを引き継いでいきたい

（宗教法人太成殿本宮　高見澤玉江　46歳）

今回お世話になりました国文研の皆様、本当にありがとうございました。お蔭様で大変充実した四日間でした。太成殿本宮は、戦前から戦後にかけて小学校教員を勤めた祖父が教員をしながら神道を独学し、皇統連綿、国固め、自主憲法制定を切に願い続け、様々な御縁と経緯で奉建した単立の神社です。その祖父の影響を強く受け、自分でも志は持ちながらも漠然としたものが拭えずにおりました。気持ちだけでなく具体的な取り組み、実際の試みといった事の体感を必要としていたのだと思います。今回の合宿で先人の皆様が思いだけでなく実行された事柄を改めて学ばせて頂きました。そして参加された皆様も各々の場所で実際の活動に取り組んでいらっしゃる事を多々知りました。祖父が生きていたら、きっと嬉々として参加させて頂き、国のこと、明治の偉人方のこと、眠れない位にお話を聞き、発言していたのではと思います。祖父の意志を少しでも具体的な形として表わす事が出来るよう、今回の思いを忘れずに過ごさねばと思います。また、慰霊祭は國學院神道学科時代、伊勢神宮実習で夜の五十鈴川に行った時の事を思い出しました。周囲の明るさにまどわされずに五感を研ぎ澄まして神々や英霊の神魂と向き合うことは、自分の内面と向き合うことでもあります。雑多に追われる中でも尚大事にすべきことは何か教えてくれる貴重な体験でした。また、短歌を作るのは初めてでしたが、これからも素晴らしい歌に触れながら、自分の思いも言葉にしていく試みを行いたいと思います。

集ひ会ふ人は友より尚深き同志なるやと気付く合宿

祖父からの思ひ引き継ぎ自ら成せる勤めを果たすこの先

心に刻みたい和歌との出会い

（日本青年協議会　椛島明実　25歳）

今回の合宿教室で心に刻みたい和歌と出会いました。

一首目は明治天皇御製の

述懐

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと

二首目は防人の和歌で

足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見るかも

この二首です。明治天皇御製の「照るにつけくもるにつけて」とのご表現からは、いつでもどんな時も国民を気にかけておられるご心情が拝察され、又「わが民草」とのご表現から、肉親のごとく民を温かく思われている大御心を感じました。

防人の和歌では、夫を心配しつつ、温かく見送っている妻の気持を「清に」と表現しており、その夫の励まされている思いが伝わってきました。

これらの御製や和歌を通じて理解が深まったのが、黒上正一郎先生のご文章です。「・・そこに目にうかぶものはあるがまゝの人生に戦ひ生くる悲喜の情意である。」のご一文です。

岸本弘先生は、この戦うというのは、武器を持って戦うということではなく、人生の困難にたじろがずに生きることだと仰い、感銘を受けました。

この明治天皇や防人のうたは、それぞれの人生の困難にたじろがず、切実に生きておられたその輝きが、私を感動せしめているのだと気付かされました。その様に思った時、私自身ももっと日常の生活や仕事に一所懸命切実に取り組みたい、そしてその思いをありのままの「内心のまこと」として表現したいと思われてきました。

さらに、この事が「日本を取り戻す」ことにもつながってくるのではないかと感じています。中西輝政先生のご講義で、最も大切なのは、核心的価値観、歴史観を持つことだと仰いましたが、まさに先人の和歌から、親や友、そして天皇や国に対する瑞々しい心を感じ取っていくことが、日本の伝統、文化に根付いた価値観、歴史観を持つことにつながるのではないかと思いました。

慰霊祭

雲間から月の光のふりそそぎ祭の庭は清く照らさる

カメラ・レポート12

会員発表。㈱寺子屋モデル専任講師　横畑雄基氏は、夜久正雄先生が昭和四十一年に著された『古事記のいのち』（国文研叢書№1）を、「（『古事記』に）一貫してあらはれてゐるものは、日本といふ国家の建設に没頭し、国家の統一に心を砕いた人々の理想」であるとの一節があるが、惹きつけられた言葉であった、と紹介された。

時空を超えて通ひ合ふもの

（元地方公務員　井原　稔　68歳）

平成二十三年度から引き続いて四年目の合宿参加となった。参加するたびに思ふことだが、その都度新たなる学びと共に、深い感動が心の底から沸いてくるのを禁じ得ない。

岸本弘先生の「万葉のますらをたち」の御講義では、人麿の歌から防人の歌へと絶妙に展開していかれ、ふるさとに父や母、妻や子らを置いて公の任務に赴く防人たちの切々たる思ひが、千数百年の時を隔てて直に伝はって来、胸が熱くなるものがあった。

また、小柳左門先生の「明治天皇の大御心を仰ぐ」の御講義では、明治天皇をはじめ歴代天皇方の御製を拝誦することを通じて、常に国家の平安と国民のしあはせを祈り念じてをられる大御心を拝し、唯々ありがたく日本人として生れたことの僥倖をしみじみ感得することができた。かうした皇室と国民との君民一体の国柄こそ、中西輝政先生の言はれる日本人が守り抜いていかねばならない核心的価値であることを思ひ知ることができた。

班別研修にて

をちこちゆ友どち集ひ胸内（むなうち）を開きて語る時ぞ嬉しき

わが心ただとつとつと語りゆく至らざること思ひ知れども

合宿を終へて

甦る心地こそすれ明日よりは怠り眠るわが身正さむ

今戦後レジームからの脱却の時

（元小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄　70歳）

今、朝日新聞の誤報、捏造記事の問題が明るみとなり、戦後の自虐的歴史を見直す大きな転換点にある。中西輝政先生から「日本を取り戻す」というテーマで、領土・歴史・自立（憲法改正）という視点でのお話があった。その核になるのは歴史であり、日本語といふ言葉に裏付けられた日本の文化・伝統であることを学んだ。戦後レジームからの脱却の大きな転換の時期、それを方向づける意味ある合宿であった。

岸本弘氏のご講義

防人の筑紫に向ひし瀬戸内の海ながめつつみ心偲ぶ

朗々と家持の長歌（うた）暗唱する友の学びの深さを思ふ

小柳左門氏のご講義

水仙を手折りて見舞ふ皇后様のみ心偲び友涙する

天皇（すめろぎ）の乃木大将へのみことばの心にしみて共に涙す

慰霊祭

潮の香と波音ききつ先逝きし御霊（みたま）をまつることのかしこさ

警蹕のみ声に誘はれ背の海ゆ御霊よりくるここちこそすれ

いざなぎといざなみ神が先づ誕みし淡路の島で御霊を祭る

教えて頂いたものを受け継いでいきたい

（桐山澄子　50歳）

「プリントの歌ぐらいはすらすら言えるようにして下さい」との班長先生の言葉に勉強不足で申し訳なく思いました。

短歌導入講義では学生の頃お聞きした御名前（大日方学さん）の方が亡くなっている事を知り、北濱道先生が淡々と話されてゆく姿に悲しみの深さを思いました。

国文研は私にとって心のふるさとです。教えて頂いたものを受け継いでいく覚悟をもって生きてゆこうと思いました。

第二十一班―男子社会人―

正しい歴史の真実の一端を知ることができた

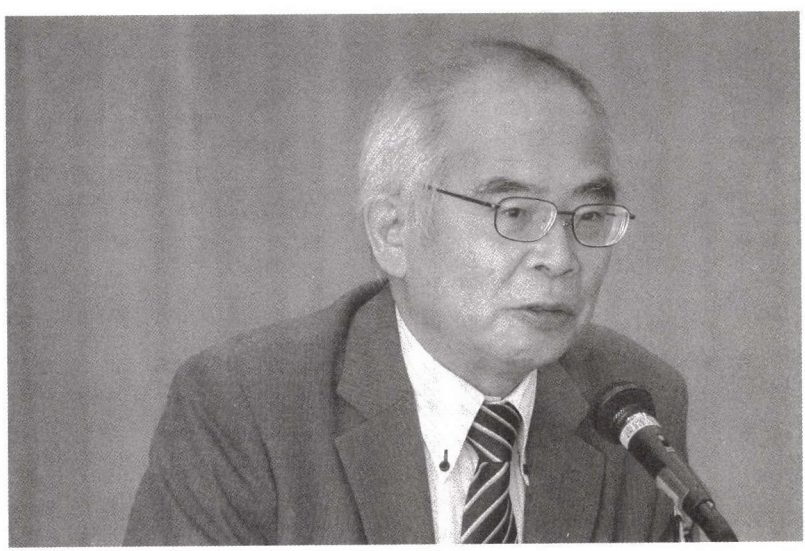
（㈶中村学園　上田洋平　34歳）

これまでわが国の歴史について不勉強であった私は、四日間の講義・講話で、「正しい歴史の真実の一端」と「いにしへから脈々と続く天皇他偉人の国及び我々への想い」を、驚きと共に知ることができました。

特に「恩」「ありがたみ」について、日常生活の中で、家族や先輩、同僚などに対して口にしたり、思いをはせることもありましたが、「皇恩」「国恩」については、深く考えてこず、非常に恥ずかしい気持ちになると共に他人事ではなく自らの事として捉えなくてはならないと痛感しました。

また、今回参加している学生さんの態度や発表に触れ、頼

カメラ・レポート13



創作短歌全体批評。三菱地所㈱都市開発二部専門調査役　青山直幸先生は、班別短歌相互批評では、まづ作者の気持ちを思ひやり、どういふことに感動したのかといふ点に心を寄せ、その感動をどういふ言葉を使ったら読む人に正確に伝はるかを班員でよく話し合ひ、整へてゆく共同作業となるやう努めてほしいと述べられた。

もしさを感じると共に、わずかでも学生さんの手本となれるよう仕事をはじめ何事においても「自ら疑問を持ち、調べ、考え、答えを出す」よう努力を重ねたいと意を強くした次第です。

先人の心と行ひ身に染みて我も学ばむと淡路後にす

印象に残った中西輝政先生の講義

（パート　西野裕史　24歳）

阿蘇合宿の時から教育問題に興味を持ち、何とかしたいという想いで参加させていただきました。最近は深刻な問題や悩みに耐えきれなくなって自ら命を絶つという事件をよく耳にしますが、周囲の人がその事の重大さをあまり深刻に考えていない気がします。

合宿で印象に残ったのは中西輝政先生の講義で、日本を取り戻す上での大事な柱は「領土、歴史、自立」であるという話がありました。一人一人が些細なことでも良いからできることをすれば、この三本の柱を取り戻すことができて、最終的には教育問題の解決に向かっていくのではと思います。

合宿で友らと出会ふ喜びを確かめ合ひて帰路につきけり

御製を味はふ感動を伝へてゆきたい

（ＩＭＳグループ本部事務局　最知浩一　53歳）

三日目の小柳左門先生のご講義でお話された「日本の素晴らしい国と明治天皇について皆さんにお伝へできるのは本当にうれしいです」といふお言葉が強く印象に残ってゐます。

明治天皇は約九万首のお歌をお詠みになられました。そのどれも味はひ深いみ歌で、特に国民の平和と国の安寧を願はれた御製を数多くお詠みになられました。今上陛下、歴代の天皇も同じです。このやうな皇室をいただく国民に生まれた喜びと誇りを小柳先生のご講義をお聞きして、そして班別研修でご紹介いただいた御製を班員で読み味はひ、改めて感じました。この思ひ、感動を是非これからも伝へていきたいと思ひました。

小柳左門先生のご講義で阪神淡路大震災の折、天皇、皇后陛下が被災地を訪問されし際のお話をお聞きして

御所に咲く水仙みづから摘み取られ持参せしとふ皇后陛下は

悲しみに沈む神戸の人々をなぐさめ給ひし陛下とともに

皇室のみ心いただくよろこびを語り伝へむみ歌偲びて

美しいものを感じる目を持つこと

（鳥栖市シルバー人材センター　西山八郎　61歳）

三泊四日の合宿を振り返り、今回も新たな友に出会えたことに感謝したい。御講義では、中西輝政先生が質疑応答の中で、守るべきものは、美しいものを感じる目を持つことではないかと言われた言葉が心に残っている。我が国は、内外に

おいて様々な難しい問題を抱えているが、国民一人一人が美しいふるさと、美しい言葉、そして美しい心を蘇らせることができたとき、目指す国の姿が現れるのではないだろうか。これからも自分にできるところから一歩ずつ進んでいきたい。

閉会式にて

講堂に響きわたる声君が代の調べ高らかにうたひあぐるも
さまざまの人の思ひの偲ばれて御旗を見つつ胸あつくなりぬ

第二十二班―男子社会人―

旧友と共に学ぶ喜びを再確認

（㈱寺子屋モデル　横畑雄基　38歳）

今回の合宿教室には、学生時代から共に学んだ仲間の多く参加し、ありがたいことに同じ班で研修することができた。中には大学卒業後初めて参加した友もゐた。彼らと初めて知り合ったのがこの合宿教室であり、あれから数十年が経った。お互ひ年齢も重ねてきたが、懐かしさと共に、一緒に学び、意見を交せる事が出来る喜びを改めて実感できたと思ふ。

とはいへ、社会人になってからの自分は、初めて学んだ十数年前から何か成長したのだらうか、時代を動かすことはできたのだらうかと考へると、恥づかしい限りである。

友に負けぬやう、この一年をかけてテーマを決め真っ直ぐ

創作短歌全体批評。講師の心にくい解説に、顔がほころぶ。

に取り組んでいきたいと思った。

蔭山武志兄、合宿参加し、初めて同じ班となる
忙しき仕事の都合整へて遠く淡路に君は来にけり
僅かなる時間なれども君と共に意見述べ合へる事ぞ嬉しき

〝やまとことば〟を取戻し〝やまとのいのち〟を輝かせたい

（日本青年協議会　外村聖典　39歳）

岸本弘先生のご講義では、防人の歌への感動を新たにした。防人もこの瀬戸内海を船で渡り、「難波門を榜ぎ出てみれば神さふる生駒高嶺に雲そたなびく」と、風景の中に使命感の垣間見える和歌を万葉集にのこしている。切実なる肉親への思愛も、使命ある防人の任務も、あるがままに受け止め、その心のまま立ち上がる姿には本当に心が打たれる。たじろがずに真正面から立ち向かっているからこそ、その生き方が「清」に見える。私も防人のように、清く生きたいと強く思った。中西輝政先生は、「我々は歴史を奪われた民」と言われた。歴史を政治の道具として使う隣国に対して、我々青年は、悠久の日本の歴史の中の防人が発した〝やまとことば〟を取り戻し、〝やまとのいのち〟を輝かせることができるよう励まねばならないと思う。

「与へられた人生にたぢろがず生きる」事に気付いた

（㈱ハウインターナショナル　桑木康宏　37歳）

「与へられた人生にたぢろがずその人生を生きる」といふ、岸本弘先生のお言葉に、いまの仕事スタイルを継続していく力をいただきました。母への想ひ、子どもへの想ひなど、かへりみたくなるものをたくさん持ちつつも、「かへりみせず」と歌ひ、家を遠く離れて公務へ向かった防人。月に数度しか家に帰れず、子どもや妻、両親に会ひたいと思ふ気持ちを持ちつつも、いまの仕事を続けてゐる自分。時代は変れど、同じやうな思ひを抱き、同じやうな生き方をしてゐることを知り、みな同じであるからこそ、かへりみたくなる気持ちを、そのままに受け入れ、先人の生き方に連なっていかうといふ思ひが湧いてきました。

合宿研修に参加して
それぞれに世に出て己が仕事持つ友と集ひて共に学びぬ

人生の中で古典に触れる機会が少なかった事に気付いた

（西松建設㈱　蔭山武志　38歳）

今回の合宿は、実に約十年ぶり、学生時代以来の参加でした。

学生時代に参加した時の印象は、なんと言っても「短歌創作」でした。簡単そうに見えてなかなか気に入る言葉がみつ

からず、これほど心を丸裸にされる思いにさせられるものは他にはないと感じます。やっと言葉が見つかったときの短歌の旋律に自分が日本人であることを再認識させられる思いを、今回も感じました。

また、今回参加して特に感じたのは、人生の中で古典に触れる機会が少なかったと思うことです。普段の生活において、政治経済を含む様々なニュースに触れ、自分なりに勉強して知識を増やしてきたつもりでしたが、一方でそれだけでは何か物足りないと感じていました。なぜこのような感覚を覚えたのか、合宿後の生活の中でもつきつめて考えて行きたいです。

短歌を通じて心通はせる伝統文化の存在に気付いた

（㈱ハウインターナショナル　谷口耕平　27歳）

合宿を通して感じた事は、日本人は短歌を通して互ひに心を通はせるといふ伝統があることでした。

岸本弘先生のご講義で紹介された防人の歌は、妻との別れの悲しみや親への思慕の念が切々と伝はってきます。黒上正一郎先生の「そこに目にうかぶものはあるがまゝの人生に戦ひ生くる悲喜の情意である」といふ文章を引用されましたが、その「あるがまゝの人生に戦ひ生く」といふ言葉より、さういった情念がありつつも、自身の国を守るといふ防人の役割を受け入れ、懸命に生きていく防人の姿を偲ぶことができま

カメラ・レポート15

講話。「国を守るといふこと」と題し、昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦先生は、かつて小林秀雄は「銃をとらねばならぬ時が来たら、喜んで国の為に死ぬであらう」と語った。学問とは、この覚悟と連なるものだ。自らのこととして思ふことから、責任感が生れるのではないかと語った。

した。

小柳左門先生は様々な御製をご紹介下さいました。明治天皇から今上陛下に至るまで、国民の事を思はれてゐる大御心が御製から偲ばれました。短歌を通して皇室と国民とが通じ合ふことが大切な日本の伝統であらうと思ひました。

み友らと語らふ時は疾く過ぎて夕日の差せば家路につきぬ

第二十三班―男子社会人―

先人の生き方を学んだ四十年振りの合宿

（元NOK㈱　末次直人　61歳）

学生の時以来、四十年振りに参加させて頂きました。

この合宿で日本の歴史・文化を学び、諸先生諸先輩達との交流を通じ永年忘れていたものを思い出しました。これから日本のことを学んで行けるという喜びを感じています。

諸先生の御講義は「先人の思い」を伝えるべく、時に声を詰まらせながら、我々に語りかけて下さいました。正に今を生きる我らの生が日本の歴史に連なっていることを実感させて頂いた時でした。

この合宿で得た素晴らしい体験を郷里熊本に戻って、家族・友人・知人に是非語って行かねばならないと思いました。

小柳左門先生の御講義で明治天皇に乃木大将が謁見された折のことを

戦ひに斃（たふ）れし数多（あまた）ますらをの名を奉る涙ながらに

交流の家の朝の集ひで

爽やかな朝の集ひで吾が代表和歌を学ぶと子等に語るも

次代を担（にな）う若者の育成を

（追手門学院大学 客員教授　牧 美喜男　64歳）

私は関西で寺子屋活動に参画しています。偉人のことを若い人達に紹介するのがその内容ですが、勉強不足を日々痛感しています。

「万葉のますらを達」と題して話しをされた岸本弘先生の御講義、また「明治天皇の大御心を仰ぐ」と題して話しをされた小柳左門先生の御講義、何れも大変感銘を受けました。

私はこうした素晴らしい講義を聴ける合宿教室参加者が百名余とあまりに少ないことを残念に思います。しかも参加人数も年々減少していると聞きます。それでは合宿教室の存続自体が危ぶまれます。

今の若者は自分の國や歴史のことには関心がなく、問題意識が少ないことを日頃私は感じています。

本会も来年が設立から六十周年を迎えられると聞いています。貴重な活動であるだけに今の時代に合った活動に転換することが必要ではないでしょうか。

全体感想自由発表の折のことを

己が思ひ噛みしめながら語りゆく若人達の頼もしきかな

先人の詩と哲学に学ぶこととは

（日本大学 文理学部教授　夜久竹夫　66歳）

合宿地に来る途中四国と淡路島に架かる鳴門大橋を車で通ったのですが、技術の粋を集めた大橋にも目を見張りましたが、その昔苦労して舟で渡っていた昔の人のことを思いました。

今林賢郁理事長が「合宿をかへりみて」と題して話しをされた中で「この合宿は〝心を働かせる場であった〟」という言葉が非常に印象に残りました。

また、講堂の壇上の幟（のぼり）に掲げられた「先人の詩と哲学に生きる証を見出そう」の言葉の「詩と哲学」は何を意味するか正確には分かりませんが、合宿から帰って講義のレジメをじっくり読んでみようと思います。そして、先人の思いに感動し、それをどうしても子孫に伝えたいと思って初めてその言葉の意味も分かって来ると思います。

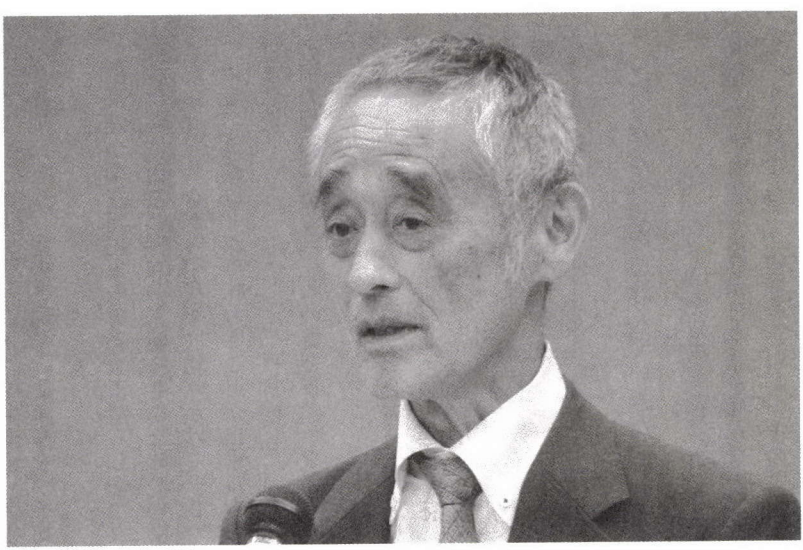
渦潮を越えて来りし合宿（つどい）かな心に残る歌伝へたし

深く考えさせられた

（日本ベーリンガー・インゲルハイム㈱　出村信隆　57歳）

中西輝政先生の「日本を取り戻すとはどういうことか」と

カメラ・レポート16



慰霊祭説明。元山口県立高校教諭　寶邊矢太郎先生から、この慰霊祭は、私たちの心をととのへ、国のために尊いいのちを捧げられたすべての祖先のみ霊をお迎へし、海の幸山の幸をお供へしておもてなしをし、その方々をお偲びし、私たちもまた受け継いでゆきたいとの思ひをこめてお祭りをしたいと思ひます、と述べられた。

いう演題のご講義も大変印象的でした。日本国憲法を時の権力の中枢・GHQから最初に受け取ったのは、時の総理大臣吉田茂と通訳の白洲次郎でした。天皇は国民の最初の一人に過ぎないと書かれた内容に彼らは仰天した。しかも「この憲法を受諾しなかったら天皇の安全は保証しない」と言われ、泣く泣く受諾するより他はなかった。彼らの無念さは如何ばかりだったか。その白洲次郎でさえも晩年に「日本はこれだけ豊かになったという意味で、日本国憲法は案外良かったのではないか」と言われたとのこと。「豊かさは最大の悲劇である」と言われた中西先生のご講義で出て来た言葉について深く考えさせられました。

ますらをの名もなき民と人麿のとも見る景色変らずと思ふ

素晴らしかった合宿での諸先生の御講義

（SIS㈱　内田厳彦　68歳）

合宿初日、武田有朋先生の明治の偉人後藤新平の生涯を紹介された導入講義は素晴らしかった。台湾統治および日本の國のためにこれほどまで尽くされていたとは。それでもなお、「我が国に生まれた事の広大なる皇恩にまだ応えていない」とする偉人の御生涯は詩と哲学そのものであった。

二日目の岸本弘先生の「万葉のますらを達」と題して講義された話しの内容も素晴らしかった。柿本人麻呂の歌と防人の歌を詠んで聞かせるように独特の口調で我々に語りかけて来られた。柿本人麻呂の歌が情景を詠みながら非常に叙情的である理由は人麻呂は歌人であると同時に、家に愛しい人を残して任地に赴く、防人と同じ「ますらを」であったからだと思った。

三日目の小柳左門先生の講義も素晴らしかった。

先生は明治天皇の御製の素晴らしさを味わい深く、時に声を詰まらせられながら、我々に語りかけて下さった。御製を仰ぐにも、これほど深く味わうことが出来るものかと感銘を受けました。

合宿の標語にある「先人の詩と哲学」を深く学ばせて頂いた合宿研修でした。

黒上正一郎先生の故郷を遠く淡路島より望んで

師の君の御歌に仰ぎし眉山の海辺の彼方遠霞み見ゆ

第二十四班―男子社会人―

これからも短歌を詠んでいきたい

（AIE地域企業連合会　斉藤拓馬　24歳）

私は、この合宿で自分が日本語を知らないということに強く気づかされました。短歌を詠む時、その時の感情、情景、状態をありのままに表現する言葉が思いつかない、知らないということにショックを受けました。班別短歌相互批評の時

に、自分の作った短歌を説明したところ、班員のみんなからより良い表現を考えていただき何とか一首の短歌を完成することができました。自分の感じたことを一文にするのにこんなにも苦労するものなのかと思いました。

日々の生活で様々な人々とコミュニケーションを取る中でより良い表現で伝えるようになるためにも、この短歌を詠むことは一つの訓練になるのではないかと思います。その時々でありのままの率直な表現を取れるようになるためにもこれからも短歌を詠んでいきたい。

歌詠まむと思へど言の葉見つからぬ足らはぬ己を悔しとぞ思ふ

取り戻すべきものは「大和心」

（㈱ライフプラザパートナーズ　河崎由紀夫　53歳）

素晴らしい合宿に参加できました。国民文化研究会、講師、同班の皆様、誠にありがとうございました。

我々が取り戻すべきものは「大和心」であり、感性、脳幹で感得するものでありましょう。神代の時代より歴代天皇は大和心の体現者であられました。それは和歌を詠むことにより研ぎすまされ我民族が上下等しく抱き続けてまいりました。大和心は、先の大戦の敗戦により否定され封印されてしまいました。

我々の使命は大和心の復興を国家レベルで取り戻すことであると思います。任重くして道遠しではありますがささやか

慰霊祭は宿舎から徒歩三、四分ほどの浜辺（吹上浜）で、潮騒を耳に満天の星を仰ぎ、厳修された。祓詞に代へて山口秀範常務理事による和歌朗詠、磯貝保博参与による御製拝誦、澤部壽孫副理事長による祭文奏上の後、参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。

ではありますが大和心を復興してまいります。

吹上浜の慰霊祭

虫鳴きて波はさざめき風そよぐ斎庭にいまし御霊迎へむ

日本の心は卑近なところにある

（福島義榮　66歳）

日本の心は卑近な所にあると気づかせてくれた合宿教室でした。それは、あいさつと礼（お辞儀）です。日本人は日々の生活の中で実行してゐることが恥づかしながら老境に入り良く分かりました。合宿教室では講師の講義、班別研修の前後に礼をします。これは普段の生活で起床時、就寝時、食事の前後など日本人ならあたり前に実行してゐます。時間を守ることの実践も大事であることを学ばさせていただきました。諸先生方、先人、ご先祖の教へを毎日の生活に生かしてまいりたい。合宿教室の関係者に心より感謝申し上げます。

吹上浜の朝の集ひにて

海に向かひ浜に立ちたるみともらのうれしげにみゆ朝日照りきて

ひそかに燃えています

（元三菱重工業㈱　村瀬孝志　71歳）

以前より関心の深かったこの合宿教室に知人の紹介で参加の機会を得ました。願わくばもっと早く若い時に参加しておれば今の自分とは違うもっと活力のある社会人になれていたのではと反省しきりです。歴史の詳細を知ること、先人の哲学に触れること、友と力を合わせ考えを高めること、先輩達の厚い思いに触れたこと、和歌の力を認識できたことなどが大きな成果でありました。明日からの実生活で生かすことができる、周りの人達に刺激を与えることができるのではないか、とひそかに燃えています。

この合宿教室が多くの人に伝わり良き日本人が増殖し日本文化が日本人全体に行き渡り平和で豊かで和やかな美しい日本ができ上がることを夢見ています。

ゆきわたれやまとごころの豊かさの教へ日の本すみずみまでに

思ひも寄らず胸にひびき沁み渡る言葉

（羽後信用金庫石脇支店　須田清文　59歳）

生きた言葉に集中しながら合宿教室でご講義を聴き、班別研修していくと思ひも寄らず胸にひびき沁み渡る言葉や文章がある。

我が母の袖持ち撫でて我が故に泣きし心を忘らえぬかも

千余年の年月を超えて万葉集にある、名もなき防人の感動がその言葉を通してここ淡路の地で、秋田の一地方に住む私の心を揺さぶり声に出して詠むと思はず涙があふれてきました。皆様のおかげで新たな体験をさせていただきまして感謝申し上げます。

帰り際に班員の皆様から質問と提案がありました。「こんなにすばらしい合宿教室なのになんで大学生の参加者が少ないのですか」「パンフレットをシンプルにするとよいと思ふ。」来年の合宿教室に活かしていきたい。

廣木寧合宿運営委員長の誕生日を祝ひて

祝ひごといへどみ友は合宿に集中してをりうはの空なり
いたつきはいかばかりならむ連続でつとめきにけるをさの仕事は
これからは今にも増して文書きて我に読ませよますらをの友

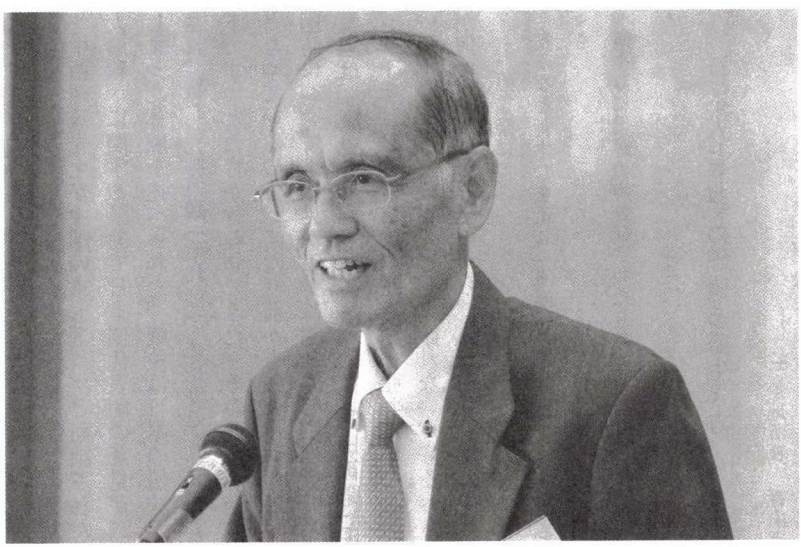
日本人の精神の美しさに気づかさせられた

（若築建設㈱　東京支店　池松伸典　58歳）

中西輝政先生は今日本が取り戻さなければならないものを「日本の領土・日本の歴史・日本の主権」の三点に絞って、現状日本の抱えている問題を明らかにされた。さらに何よりもその根本にある日本人の精神的価値観を取り戻すことの大切さを訴えられた。この合宿での先生方の御講義も、後藤新平、柿本人麿、防人、明治天皇とそれぞれに遺された短歌、御製、文章などの具体的な言葉を通して日本人の精神を蘇らせられて、我々は感動をもって日本人の精神の美しさに気づかさせられた。

ともすると日々の生活に追われ自らの生き方を見つめ直す機会を失いつつある自らを省みさせられる。自分に求める気持ちさえ有れば日本の素晴らしさに触れる機会はたくさんあ

カメラ・レポート18



合宿をかへりみて。今林賢郁理事長は、初日からの日程に添ひながら合宿を振り返られた後、合宿を契機にひとりひとりが自ら勉強して、自分の言葉で日本に生れてきて良かったと自信を持って言へるやうになっていただければ、こんなに有難いことはない、と結ばれた。

ることを気づかされる合宿であった。

第二十五班―男子社会人―

歴史の見直しを

（鹿児島県信用保証協会　野間口俊行　62歳）

澤部壽孫副理事長の閉会式での挨拶にあったように、戦前の軍部の中枢部にコミンテルンの手先が存在してゐた。私は、所謂「謀略史観」には疑問を感じてゐたが、最近の月刊誌「ｗｉＬＬ」や鳥居民氏の論文を読むと歴史の見直しの必要を感じてゐる。この問題は、なぜかくも戦後長きに亘り「東京裁判史観」が続いてきたかといふ、私の長く疑問に思ってゐたことと関連があると確信するに至ったからである。それは、上層部の生き残った一部の者にとって、戦後の風潮が自分たちの歴史的事実としての過誤を隠ぺいするに都合が良く、その持続に努めてきたのでないかといふことである。

今度の合宿では、色々なことを教へ、気付かせて頂き、有意義なものであった。

特攻隊のみ霊偲びて
君が代を唱ふをりしもまざまざとみ姿浮かびて涙込みあぐ

日本人の譲れない伝統を学ぶ

（森重忠正　70歳）

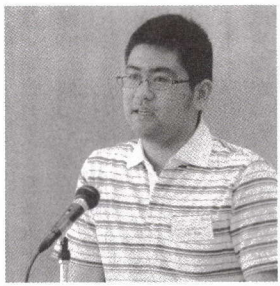
中西輝政先生が中国の軍人トップと面談された時に、「南京大虐殺」に関する議論で日本側代表団の意見が二つに割れてしまった体験を述べられた。戦後は日本の伝統、文化が抹殺され、新しい価値観（それはアメリカでも許されないような）下でずっと教育が行われてきた。その世代が今の日本の中枢となっているので、当たり前かも知れない。天皇についても、国防についても意見が二つに割れている。そのスキを中国、韓国は「歴史認識」でついてくる。朝日新聞に代表されるジャーナリズムが日本の足を引っ張っているという嘆かわしい現実がある。日本人として譲れない、守るべき伝統。それが何であるかを考えながら、これからも学んでゆきたい。

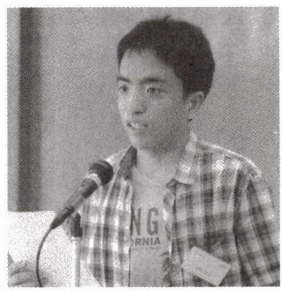
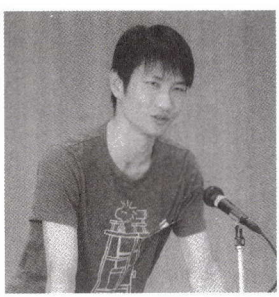
慰霊祭にて
友みなと背すじを正し「海ゆかば」みたまにとどけと唱ひあぐるも
暗やみに警蹕（けいひつ）の声ひびきわたりみたま降りたつ父君もまた

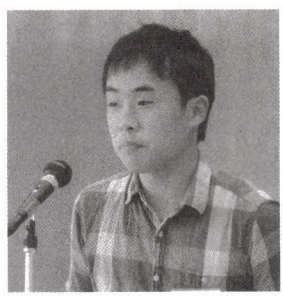
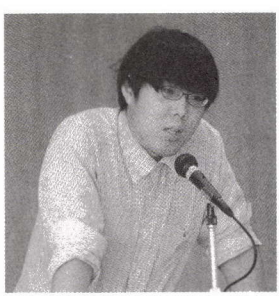
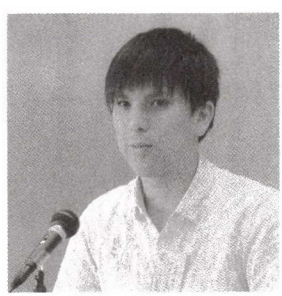
日本人としての価値ある生き方

（三菱地所㈱　青山直幸　65歳）

久しぶりの合宿参加で、新鮮な気持ちで取り組むことができた。初めての社会班であったが、心ゆくまで語り合ふこと



全体感想自由発表。「自分はよく勉強してゐたつもりだったが、まだまだ井の中の蛙だった」「中西輝政先生が『領土』『歴史』『自立』を取り戻さねばならないと言はれたことに感銘を受けた」「防人の歌を読んで、征く人の心情に思ひを寄せることができた」「自分は教師を目指してゐるが、この合宿で学んだことを子供達に語りたい」「心に残った明治天皇の御製を拝誦したい」「自分は話し下手だが、班員が一所懸命に聞かうとしてくれた」「自分の歌を皆が心を一つにして添削してくれたことが最も心に残った」と様々な感想が率直に発表された。

ができ、有意義であった。社会人としての日々の仕事や活動を踏まへての発言には、味はひ深い言葉が多かった。今後、勉強をしていく上での新たな課題やテーマが見つかったやうな気がする。

中西輝政先生の講義は、現下の日本の本質的な課題を①領土②歴史③自立～憲法といふ三つの視点でわかり易く整理され、霧が晴れるやうであった。文明史や国際関係について長年の緻密な研究実績があればこその明確な御話であった。最後に言はれた「日本人としての価値ある生き方」といふ言葉が心に残ってゐる。

岸本弘先生、小柳左門先生の御講義は、日本人が古来から大切にしてきた〝日本人のこころ〟を、柿本人麿や防人の歌、明治天皇の御製を一つ一つ心を込めて解読されることを通して伝へんとされた、素晴らしい内容の講義であった。参加者は少なかったが、内容が濃く、レベルの高い合宿であったと思ふ。

慰霊祭にて

秋の夜のしじまの中に師や友のみたままつりの祭壇浮かびく
祭壇の上ふと見れば雲切れて明く清(さや)けき満月の見ゆ
祭壇の前に友らとゐ並べば浜ゆ潮騒の音聞え来る
祭文を読みあぐる声朗々と響きわたりて心にしみぬ
あまがけるあまたの亡き師や先輩のみたま偲べば面影浮かびく

和歌を通して生き方を学ぶ

（元 福岡県立筑紫丘高校総括教頭　小林　至　64歳）

今回の合宿教室は、国文研源流の黒上正一郎先生の徳島、黒上・梅木紹男先生の友情の地、撫養を望む事が出来る淡路島で開催された事は、大変意義が深い事であった。学生の参加が減少する中、今一度国文研の原点を振り返る良い機会になったのではないか。

「先人の詩と哲学に生きるあかしを見出そう」。先人の和歌を通して生き方を学び、日本の心につらなる体験は、正しく日本人として生きるあかしである。

これからも太子会での勉強を大切にして行きたい。また、父の短歌の整理を通して短歌も勉強したいと思う。

慰霊祭の折りに

吹上の浜辺に降りて見あぐれば白き雲間に中秋月の輝く

短歌を学び続けてゆきたい

（大村郵便局　郵便課　橋本公明　59歳）

初めての淡路島合宿で、学生時代からの課題である〝学問いのちに至る道〟と言ふ事が、今迄は漠然と考へてゐましたが、この合宿で、やまとのことばに心を働かせてゆく事こそが大事な事と気づかされました。

長崎に帰ってからも、短歌を学び続けてゆきたいと思ひま

す。

小柳左門先生の講義をお聞きして
一首づつ御歌詠み上げこみあぐる涙こらへて話されゆきぬ

国民文化研究会

歌の良さが直接響いてきた

（NTT西日本㈱　武田有朋　32歳）

岸本弘先生のご講義が一番印象に残ってゐる。人麿の歌や防人の歌を詠み上げられる声の響きが誠に心地よかった。歌の良さが聞き手の心に直接響いてくるやうなご講義で、強く感銘を受けた。

師の君の詠み上げられし人麿の歌の調べの心に染み入る

心に響く話を聞かせていただいた

（㈱ラック　高橋俊太郎　36歳）

今年の合宿でも様々な事を学び、心に響く話を聞かせていただきました。その中で一つ挙げるとすれば、中西輝政先生のご講義があります。「日本を取り戻す」ということで、「歴史の問題」について言及されたのが印象に残っています。特に最後の「大東亜戦争の価値観」としてアジアの解放のため

カメラ・レポート20

合宿運営委員長挨拶。廣木寧合宿運営委員長は、日本人といふものは、日本人としての“詩と哲学”の中で外来文明を摂取融合し、つねに自己の文明を蘇らせてきた大変な民族である。我々もその血を受け継いでゐる。どうか学問を続けていただきたい、と呼び掛けられた。

に動いたという点は確かにと思ひました。しかし、すぐにこの価値観を広められるのではなく、その前段階の中韓との歴史の話があることも指摘されて、あの問題は、解決するだけで終りではなく、その先があるのかと認識を改めさせていただきました。

慰霊祭にて

波の音を後ろに感じ厳かに詠みあげられる祭文を聞く
儀式終へ宿舎へ帰る道すがら虫の鳴音大きく聞こゆ
気がつけば祭文聞き入る間には寄せる波音聞こえざりけり

大変楽しく嬉しい講義でした

（FTIコンサルティング　伊藤俊介　37歳）

武田有朋兄の講義では、後藤新平の事跡が丁寧に紹介され、特に台湾統治における大胆かつ台湾原住民に親身の施政が解説され、人物の器の大きさに触れることが出来ました。さらには、後藤新平が晩年に「政治の力」について警鐘をならしたことを学び、またその姿勢の根底には聖徳太子の『十七条憲法』があることも教へられ、大変驚きました。

国文研の講義では取り上げられることの少ない、明治末から大正にかけての政治家・行政官の一人である後藤新平について学び、また彼の哲学にも我が国の伝統が脈々と受け継がれ流れていたことを学ぶことが出来、大変楽しく嬉しい講義でした。

武田有朋兄の講義を聞きて

新平はかく台湾を治めしと語りし友の姿たのもし

中西輝政先生の重大な御発言

（元新潟工科大学教授　大岡　弘　67歳）

中西輝政先生の御講義で、「現下の世界的混乱の発火点はどこになるか、―世界の識者は、日中関係が危いと見てゐる」と私には受け取れる御発言があった。来年は第二次世界大戦終結七十年といふことで、中国は歴史戦争をしかけてくる。我が国はこれをやられると日本人が二派に分かれるので、それが国内政治の不安定を誘引し、国家意思統一の阻害要因となる。この問題ではアメリカも中国に与し、さらに日本の内政が不安定になるおそれが出てくる。このやうな内容の御発言だったと思はれる。勉強をしなければと思はせられる重大な御発言であった。

慰霊祭開始の前のひと時に

うす雲のたなびく空にみち月のかげのしるくも見ゆる夜半かな
寄する波返す波の音耳にしつつ厳かならむこよひのみ祭

憲法改正の大前提

（拓殖大学日本文化研究所客員教授　山内健生　69歳）

日本の文化と伝統が太古から連続して現代に生きてゐるこ

とを改めて実感した。紹介された万葉の歌を通して、御製を通して「日本の心」の実在を実感した。中西輝政先生が仰言った「日本人にとっての核心的価値」とは、まさに太古に連続する日本の文化であり、具体的には「日本の国柄」のことであらう。いつの時代も国の中心に天皇を仰いできたその歴史的な国柄こそ、日本を日本たらしめてゐるものに他ならない。「押しつけ憲法」（連続性を断ち切らうとする成文憲法）を戴かざるを得なかった占領体制が実質的に続いてゐる。憲法九条の条文云々の問題もさることながら、根本において歴史の連続性の大きな意味を広く深く国民各層、われわれが実感することが憲法改正の大前提であると痛感する。妙な条文いじりでは国が分裂することにもなりかねない。歴史的な国柄、「日本人のこころ」に裏うちされた憲法の実現は前途遼遠であるが、正道であらう。そのための営みが合宿教室だと思ってゐる。

慰霊祭

虫の音のすだく浜辺のたままつり寄せくる波の音の聞え来

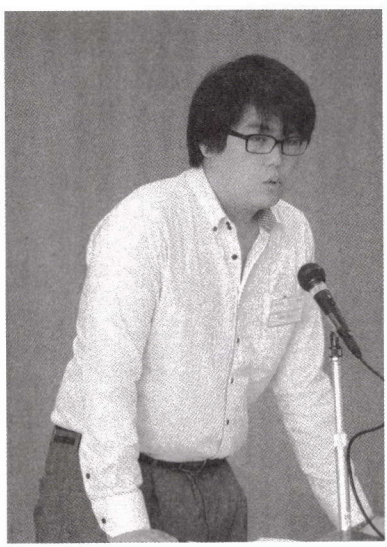
しほさゐと鳴く虫の音の聞えくるみたままつりのありがたきかな

虫の声にさざ波の音も加はりしことしのみまつり心に残りぬ

○

いにしへにつらなる国のみいのちをあらためて覚ゆる合宿なりき

国のいのち断つべからざるのわが思ひ諸講義を聞きていよよ深まる



閉会式。国歌斉唱に続き、主催者を代表して澤部壽孫副理事長（右）は、「無責任な言論が蔓延る社会に出てたぢろがないために、自分の眼力を深める学問を続けて欲しい」と挨拶された。参加学生を代表し立命館大学文学部三年の藤新朋大君（左）は、事実の羅列といふ「歴史」だけでなく、先人たちの残した言葉や和歌にその心を学び、触れるといふことを経験したが、このやうな機会をこれからも持ち続けることが重要だ、と述べた。

合宿中に創作された「短歌詠草」

―しきしまのみち―

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の北濱　道氏（元㈱アルバック）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の青山直幸氏（三菱地所㈱）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

東京大学大学院　工　二年　菊地建人

渦見むと傾き進む船の上に母立ちたらばさぞ喜ばん

福岡大学　経　四年　小林拓海

海峡に出来ては消ゆる渦潮を父母連れて今一度見たし

東京理科大学　理　一年　切明航太

港出る時待つほどの揺蕩（たゆた）へる船心地よし潮の香もして

中村学園大学　流通　二年　髙尾弥沙樹

渦潮に傾く船の甲板にバランスくずす子供を支ふ

皇學館大学　文　一年　江崎義訓

福良港にある小島の鳥居を見て

行き難きこれの小島に今もなほ神祀りする人ら尊き

拓殖大学　政経　二年　大貫大樹

雨の中夢中になって大き渦に見入りたりけり濡るるも忘れて

興銀リース㈱　小柳志乃夫

鳴門遊覧船にて

波もなき青き海面（うなも）のところどころ裂けて滝ししぶきあぐ見ゆ

大橋のたもとの辺り激しくも波せめぎあひしぶきあげたる

渦巻きのいづくに起ると若きらと目をこらし見る雨に打たれつゝ

㈱ＭＣエバテック　天本和馬

雨煙る海面かすむもともの先大鳴門橋かなたに見え来

かなたよりこなたに向ひ果しなく潮は落ち来る滝のごとくに

かつよどみかつうづ巻きて大海は猛りて元に戻らむとするか

第二班

京都大学大学院　二年　渡邉大士

朝の集ひにて「桜井の訣別」を歌ひて

桜井の訣別を歌ひしみじみと武士の姿に心打たるる

京都大学　工　二年　安永知生

先人の技は自然と溶け合ひて海峡に建つ鳴門大橋

明星大学　情報　四年　岡松優

雨の中波に揺られて橋の下の渦潮の音に心おちつく

國學院大學　神道文化　二年　横川翔

みたみあれさきつまねびをまねびつぎすめらがみよにつかへまつらん

おろかなるあれもいままたいかまほしかみよながらのしきしまのみち

中村学園大学　教　一年　太田鴻平

渦潮の激しき波のぶつかりて船傾きて驚きぬるかな

平山直樹税理士事務所　北村公一

参加者の名簿に幾年会はざりし友の名前を見つけて嬉しき

㈱寺子屋モデル　山口秀範

北濱道君の講義にて大日方学君の歌の紹介されて

惜しまれて逝きしみ友の歌掲げ思ひ出たどるを聞くは悲しき

山路行き霰に遭（あ）ひても已れより集ひの友らを

気遣ひし歌
黙々と務め果たして控へ目に笑まふ面輪の忘れ難しも
去年の夏見えし友の急逝は今更ながら口惜しきかな

（二回目の作品）
最終日朝の集ひにて
浜辺には秋の気配の漂ひて見上ぐる空にひつじ雲湧く
あたりには浜百合さはに咲き揃ひ鳥が音遠く涼風渡る
小波の寄する潮の音心地良く昨夜のみ祭り思ひ出づるも
潮騒と虫の音すだく浜辺にて仕りぬみ霊和めを
青白く清しき月影み祭りの始めと共に雲に隠れつ
天翔るみ霊は斎庭に集ひまし空曇れりと思へば嬉し
師友あまたいませる中に若くして急かに逝きし友も入るらむ
年毎の営みなれど潮の香も添ひて一入心ひかれぬ
み祭りの余韻胸内に響きつつ朝の気を吸ひ心清しき

第三班

専修大学　経営　三年　芦田和久
様々の波が集ひて渦を巻く姿雄々しき鳴門海峡

福岡教育大学　教　四年　前川大基
観測船に乗りし折に
穏やかに広ごる海の遠き先潮ぶつかりし白き波見ゆ
東西ゆ流るる潮のぶつかりて白きしぶきの激しく立ちたり

立命館大学　文　三年　藤新朋大
渦潮の真中を見ればその底はいかに深しと思ひめぐらす

早稲田大学　法　四年　有坂真太郎
雨降りて暗き海面に渦潮の水音遠く響き渡れり

長崎大学　教　二年　橋口佳生
船の上で鳴門海峡を見し折に
白き泡散らせてうねる渦潮の青き海面は美しきかな

㈱IHIエアロスペース　内海勝彦
鳴門渦潮船上散策
待ちをりし鳴門渦潮遊覧の船はゆくりと桟橋離る
瀬戸内と太平洋のはざまなる鳴門海峡近づきてあり
をちこちに小さき白波見えはじめ渦潮近しと友は語りぬ
大潮の間近に船は迫り来て海面の落差眼前に見ゆ
高きより低きに落つる潮流を滝さながらと驚き見入る

中島法律事務所　中島繁樹
大橋の下は海はら一面に白く波立つ渦潮ありき

第四班

福岡大学　経　三年　岡部智哉
おのころ島の浜辺に響くさざ波と共に歌ひし「我は海の子」

早稲田大学　政経　三年　北林裕教
吹上浜の朝のつどひにて
友皆と「われは海の子」を声そろへ歌へる時は楽しかりけり
声そろへ歌ひあふ歌さはやかに淡路の海に流れ行くなり

京都大学　経　四年　山内　遼
大鳴門橋へ向かふ船上にて

降る雨にかすめる橋へ近づきて今か今かと渦見るを待つ

福岡教育大学　教　聴講生　山本泰之

古典講義、班別研修左門先生のお言葉をうけて

一つ一つの地に神々の宿りしを信じて歌に詠まるると聞く

改めて偲べば人麿の言の葉に祈りの思ひが伝はりてこし

渦潮散策

次々と起こりし渦見て周りから「すごい」との声わき起こりたり

靖国神社崇敬奉賛会青年部　相澤　守

合宿地へ向かふ折、駅にて

合宿への参加叶はぬ愛ほしき君との別れ迫りくるかな

折尾愛真短期大学　松田　隆

初めて湊川神社に参拝して

楠公の御跡訪ねし感激をいかに伝へむつどひの友らに

「万葉のますらをたち」の講義を聞きて

「万葉のますらをたち」の歌々に我の心も動かされけり

熊本市役所　折田豊生

ゆるやかにエンヂン音を響かせて船はすべりゆく静けき海面を

一面に白波立てて荒れ狂ふ海に今しも船は入りゆく

押し寄する津波の如く中瀬越え潮は滝なし流れやまずも

うづの花しりへに見つつ小雨降る海面を友らと港指しゆく

第十一班

佐賀大学　文化教育　二年　西山寛子

ごうごうと荒波立てて渦を巻く中に極立つ白波美し

筑紫女学園大学　文　三年　山崎春佳

ぐらぐらと船傾きて海見れば渦巻く潮の力なるかな

西南学院大学　経　三年　宮田麻央

うづしほの迫力見んと楽しみで待ち遠しさに身をも乗りだす

熊本県立大学　総合管理　四年　井上裕紀子

瀬戸の海白波たちたる大渦を見つむるうちに目まひを覚ゆ

㈱ファミリーマート　金澤仁子

船酔ひに疲れし友に尋ぬれば大丈夫との笑顔まぶしき

元皇宮警察本部長　小田村初男

岸本弘先生の御講義を聞きて

万葉の歌に詠まれしますらをの悲しき想ひ今に伝はる

今もなほ仇なす国の有りければ国守る務め果たす人あり

第十二班

日本青年協議会　椛島明実

大波にのまるるがごと船ゆれて友と声合はせ驚きにけり

激しくも渦巻く上に大橋をかけし日本の技をば思ふ

宗教法人太成殿本宮　高見澤玉江

うづ潮と人の手になる大橋の共に在りたる景色楽しや

日本語教師　鈴木のり子

注ぐ潮あらがふ潮のせめぎ合ふ鳴門の渦を吾子と見まほし

内山慶子

明石橋渡りて行けば淡路島映ゆるみどりの棚田美し

海の面に渦まく潮をながめつつ自然の力の不思議さ想ふ

華泉書道会　坂本和代

音にきく鳴門の渦の迫力に足はすくみて声も失ふ

桐山澄子

班別研修

班友の感動されし言の葉に耳かたむけむ心あはせて

バスにて福良へ向かふ

車窓よりひろがりわたる田んぼ見ゆ我の田辺も似たる景色よ

難波江紀子

昭和二十二年熱海魚見崎沖にて新憲法公布を憂ひて投身自殺されし清水澄博士を偲びて

あらたなる憲許さじと身を投げてみさきに果てし博士をおもふ

元地方公務員　井原　稔

敦盛の首塚ありと人の言ふ淡路の島を右に見て行く

白き波けたてて進む遊覧船行く手は遙か鳴門うづ潮

激しくも逆巻くうづ潮乗り越えて船ををしくも進み行くなり

元小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄

交流の家に集ひし子供らと国旗を掲げることのかしこさ

日の丸を高くあげれば大空の雲間の切れて朝日かがやく

海流の寄せきてうねり白波の立てる渦潮ゆくへもしらず

おだやかな海を引き込みうづまける力のもとはいづくより来し

第二十一班

鳥栖市シルバー人材センター　西山八郎

鳴門海峡にて

白波をあげて逆まく渦潮をおどろき入りてひたながめけり

ＩＭＳグループ本部事務局　最知浩一

雷の音近くまで迫り来ぬ鳴門大橋渡るころには

今頃はレクリェーションの時ならむ集ひし友らは雨にぬるるや

㈻中村学園　上田洋平

淡路にて絶えずぶつかる波のごと熱く友らと意見交さむ

下関国際高校教諭　秋田崇文

鳴門渦潮を眺めて

絶え間なく立ちては渦巻く白波に古人の船出の難きを偲ぶ

パート　西野裕史

鳴門渦潮船上散策にて

くりかへしわきてはきゆる渦潮の様子をめでつつ友らと語る

㈱ハウインターナショナル　石井　匠

船乗れば心地よき風吹きけるも雨滴のかかり肌寒くあり

元福岡県立直方高校教諭　小野吉宣

なつかしき友等かけつけ旧交をあたため合へり尊きかぎり

敦盛の御霊まつれる島見れば源平の代にもどる心地す

遠景の大鳴門橋に近づけば神々しかる雄姿を仰ぐ

船はゆれうづ潮の巻く海峡を乗り越えてゆく勇壮ならずや

（二回目の作品）

小柳左門兄が明治天皇御製「ますらをも涙をのみて国のためたふれし人のうへを語りつ」を解説せし折に

「涙のみ」語る「ますらを」誰なのかわからぬままに我は過しき

大前に進み語るは乃木大將と友は言ふなり判然とする

大君も涙流して聴き給ふみ姿尊く見えてくるなり
国の為生命ささげしますらをに君臣ともに涙流しき
美しき名画ならずや君臣が水魚の如く交はり給へり
君臣が共に涙すうるはしき日本の国柄ここに見るなり

第二十二班

㈱寺子屋モデル　横畑雄基

白波の激しく乱るる海域に船近づきて胸高鳴りぬ
渦をまく潮の姿にあちこちで声のあがりて皆感嘆す

西松建設㈱　蔭山武志

学生時代にお世話になりし北村公一先輩に再会して
過ぎし日の記憶に変らぬ気さくさで声をかけられうれしくなりき

班別研修にて

苦心して伝へんとする友達の語れる言葉に耳かたむけり

㈱ハウインターナショナル　桑木康宏

防人の歌を読みて

顧みる心ありつつ「かへりみず」と言ひて筑紫に向かひし防人
自らに与へられたる人生をたぢろぎ見せずに戦ひ生くる
我もまたこの生き方に連なりて与へられたることに励まむ

㈱ロゼッタ　高木雅史

友達と深夜に三人集りて淡路に向けて東京を発つ
車にて眠気まなこをこすりつつ淡路へ急ぐ車中は長し
順繰りに互ひに気遣ひ運転を代れる友のをるは頼もし

児玉学税理士事務所　瀬木裕太郎

仕事帰りに本屋に立ち寄りし折に「小林秀雄―学生との対話」を見かけて
高き道学びたき思ひのたぎり出で七年ぶりに合宿にいかんとす
合宿に行かんと決めし次の日に小野大人からの誘ひありけり
是はまさに天も行くべしと言ひ給ふと笑みこぼれけり不思議な縁に

㈱ハウインターナショナル　谷口耕平

班別研修の折に防人の歌をよみて

防人の役目にのぞむ雄心のいかばかりかと皆の語れり
友達の言の葉きけば防人の心しだいに偲ばれゆくなり
役目をば受け入れらるるなればこそ詠めるみ歌も清かなるらむ

日本青年協議会　外村聖典

鳴門渦潮船上散策

見はるかす鳴門の橋の下つ方に真白き潮目の見えてくるなり
近づけば潮の流れは交はりてうねり沸き立ち生けるがごとし

第二十三班

ＳＩＳ㈱　内田巌彦

黒上正一郎先生と梅木紹男さんが交されし友情を偲びて

たぐひなき友想ふ歌交されし撫養の海辺に今向かふかな
鳴門渦潮にもまれし海草の体に良しと送られし師よ

○

渦潮の最中を船の通りけり渦数多生れ恐ろしきまで

日章工業㈱　藤新成信

鳴門観潮船に乗りて

「うたと消息」詠むたび想ふ渦潮を今眼交に
初めて見たり（黒上正一郎先生の短歌書簡集）

「荒潮の潮の八百道の八潮道の」とふ太古の
リズムを体に感ず（大祓詞）

（二回目の作品）

秋晴れの天つみ空に日は昇り日の丸の旗輝き
て見ゆ

「うたと消息」読みつつ偲ぶ眉山の姿はるけ
く浜辺より見つ

追手門学院大学　客員教授　牧　美喜男

岸本弘先生の講義を聞いて

万葉の防人の歌読みゆけばいにしへびとの心
胸打つ

万葉のますらをの歌示されしご講義のただあ
りがたきかな

元ＮＯＫ㈱　末次直人

小雨ふる福良港より舟乗りて鳴戸海峡めざし
て進む

滝なして流れ来たりし大潮は激しく流れ渦を
つくれり

淡路島合宿

四十年ぶり会ひし友らと合宿の合間合間に声
をかけたり

日本ベーリンガー・インゲルハイム㈱　出村信隆

いにしへゆ変らぬ姿大渦の上に建ちたる大鳴
門橋

信州山中を連で行く途中

入院さる吾が師を案じ走る時山の彼方に光差
したり

後日お見舞ひをしたる時

久しかる恩師の声に力あり我の願ひの叶ひて
安堵す

伊佐ホームズ㈱　小柳雄平

神まつる煙島にぞしげる樹の枝に雨しのぐ青
鷺の群

小雨降る鳴門の海ゆ眺むれば巌きりたつ淡
路島かな

第二十四班

羽後信用金庫　石脇支店　須田清文

岸本弘先生のご講義を拝聴して

千余年の年月こえてひびきくる不可思議なる
かな防人のうた

集ひたる班の友らと思ひこめよめば防人のう
たよみがへる

師の君の選びたまへる防人のうたをよみゆく
班の友らと

わが子思ふ思ひあふれて涙する母のみ心むね
にひびきく

心こめ防人のうたよみゆけばおのづと涙あふ
れくるかな

元三菱重工業㈱　村瀬孝志

国を思ひ熱心に語る友のごとくわれもまなば
む偉人のおしへを

福島義榮

目のあたり鳴門のうづしほ見し我はしばし言
葉を失ひにけり

若築建設㈱　東京支店　池松伸典

北濱道大兄の御講義を聴きて

亡き友の貴きみ歌よみあぐる友のみ声に心こ
もれり

読みあぐる友のみ声に亡き友のいますがごと
く思はれにけり

㈱ライフプラザパートナーズ　河崎由紀夫

せめぎあふ鳴門海峡の潮流に舵をな絶えそ咸
臨丸よ

ＡＩＥ地域企業連合会　斉藤拓馬

海峡の潮のうねりの激しさに仕事思ひて身ぬ
ち締りぬ

日本ユニシス㈱　大町憲朗

いざなみといざなぎの神の生み出せし淡路の
海を船出するかな

うづ潮はうねり波立ちをちこちに白波立てて
見ごとなるかな
吾子らにもかくなる不思議な波立ちをひと度
見せて喜ばせたし

（二回目の作品）
慰霊祭にて

いざなぎといざなみの神より生れましし淡路
の浜に慰霊祭行ふ
静かなる浜辺の斎庭に潮の音と虫の音聞えき
おごそかなりき
み魂らはこの地に集ひ我ら皆と心かよはせ喜
びいまさむ
み祖先らのみ心つぎて日の本のあるべき姿に
努めゆきなむ

第二十五班

鹿児島県信用保証協会　野間口俊行

福良港出でて間近に敦盛の首塚まつる小島あ
るとは
安徳の帝がしばし潮待ちさるる小島し見れば
心悲しも

元山口県立熊毛南高校教諭　寶邉矢太郎

末次直人兄合宿に来れり
四十年のへだたりこえてなつかしき君がゑが
ほの間近に迫る
格幅の良き身体になりたるもやさしそのこゑ
かはらずにあり
この夏に長きつとめををへしとぞ君がいたづ
きしのびやるかな
かつて日々をともにすごしし友が名のつぎつ
ぎうかびてはづみぬ話の
学びの道またたどりゆく発心の君がをごころ
我が身に迫る

（二回目の作品）
慰霊祭にて

星空をあふげばあやしみたまらの今宵ゆには
にあもりますとぞ
この浜辺に寄せては返す潮騒にこころしづか
にみたま思ふも

森重忠正

動き出す船からながむる福良港は長崎港に似
ると友言ふ
川のごと滝のごとくに激しくも流るる潮にた
だ驚きぬ
島と島つなぐ鳴門の大橋の巨大なる構造をし
ばし見上ぐる

三菱地所㈱　青山直幸

白波はぶつかり合ひて自ら孤を描きつつ渦
巻きてゆく
渦潮の孤は広がりてうねりつつさらに大きな
る渦となりゆく

元福岡県立筑紫丘高校総括教頭　小林　至

岸本弘先生の御講義を聞きて
ふるさとに父母を残せし防人の歌の調べに胸
のふるへり
朗々と長歌詠まるる先生の姿にしらずなみだ
浮びく

中外鉱業㈱　濱崎史嘉

海峡の潮の流れが作り出す大渦我を飲み込む
ごとし

国民文化研究会

国民文化研究会理事長　今林賢郁

岸本弘兄の古典講義（万葉の「ますらを」
たち）
いにしへの人の心に添ふごとく君語りゆく歌
を読みつつ
人麿と防人の歌をたどりつつ語ることばのす
がしきしらべよ
今の世に『万葉の「ますらを」たち』のよみ
がへる心地するなり聞きゆくまゝに

鳴門うづ潮

いつしかに鳴門大橋近づきて船は進みぬ鳴門

海峡

大橋のたもとの近く名にし負ふ鳴門うづ潮あらはれにけり
消ゆるかと思へばたちまちあらはるるうねるうづ潮見るは楽しき

拓殖大学日本文化研究所　客員教授　山内健生

鳴門なる名高きうづしほ烈しくもわが眼前に巻きて流るる
天地の大きみ力はげしくも渦まく様を目交にする

昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦

岬へと弓なりつづく白波に夕陽の落ちて海紅くなる

元㈱講談社　磯貝保博

大鳴戸橋の真下に波立ちて渦まく潮の流れ早しも
瀬戸内へ潮のはげしく流れ落ち渦巻くさまを身近にぞ見る

（二回目の作品）

新理事長のご挨拶をお聞きして

心こめ筋道とほるみ言葉は初代理事長のさまの如しや

元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘

講義の朝

語るべき時近づくを思ひつつ家持の歌誦してたしかむ
講義中にいくたびか胸はつまれり万葉のますらをの歌誦して語れば

鳴戸渦潮

海なかの滝にかもあらむ垣なして激つ海面を息呑みて見つ
集ひ得ぬ孫のしぬばゆ渦潮を相見つべしと語りし孫の
島影は雨に煙りてたちまちに暮れゆく様を飽かず眺むる

（二回目の作品）

潮騒の中に聞きたりわが先輩の告げまつりゆく祭文の声
我らまたたどりゆくかなますらをのかなしきいのちにつらなる道を

特定医療法人原土井病院　小柳左門

朝の集ひにて

おだやかに波うちよする吹上の浜辺の砂をふみしめてゆく
朝なぎのうすずみ色の沖はるか阿波の山々かすみかかれり
友みなとわれは海の子歌ひをれば大き船影沖を行く見ゆ

○

大海の潮の流れの会ふところ鳴戸海峡を今見つるかも
白波をたてて寄せくる海流のそのいきほひのすさまじきかも
海峡に寄せくる潮の八百会に白き泡たて潮はうづ巻く
波しぶきうづまく潮のただ中をわが乗る船は進みゆくかな
皆人は声を上げつつ見つめたり流れ逆まきうづまく潮を

事務局

国民文化研究会事務局長　奥冨修一

岸本弘氏の古典講義を聴きて

万葉の「ますらを」語る吾が友の学び來し道の偲ばるるかな
力ある言葉次々出でたまふ大人の講義に時を忘れつ
いにしへのみおやの言葉に包まれて生くる心地すと言ひし大人はも
まざまざと新防人の往くさまをうつつ見るがに語りたまひき

国民文化研究会副理事長　澤部壽孫

諏訪田陽山さんと淡路で五十一年ぶりに

会ふ
五十一年の歳月を経て会ふ友の面輪に残る若き日のかげ
歳月を経て会ふ友とたちまちに心の通ふ縁かしこし
班長を共につとめし大阿蘇の合宿教室の彼の日なつかし（昭和三十八年）
初に会ひ新国劇を共に見し青山合宿を語る友はも（昭和三十七年）
今は亡き師の若き日のみ姿と面輪うつつによみがへり来る（小田村寅二郎先生）
朝の集ひ（吹上浜にて）
艦に乗り海の上進む心地にて友らと唱ふ「我は海の子」
黒上の大人の故郷徳島の島影かなたにかすみて浮ぶ
鳴門の渦潮を船上に見る
名にし負ふ鳴門の渦潮間近にて息をのみつつ友らと見つむる
波頭けたててぶつかる荒波の逆巻く渦潮飽かず眺むる
（二回目の作品）
全体意見発表
若きらのいやつぎ立ちて素直なる思ひ述ぶるを聞けば嬉しき
人みなの力統べられ事もなく成りし合宿涙ぐましも
元新潟工科大学教授　大岡　弘
岸本弘先生の大伴家持についてのお話をお聴きして
一音に一字をあてて防人の歌記したるをすばらしと思ふ
正確な表現もちて後世に伝へしいさを偲びやまずも
元川崎重工業㈱　山本博資
淡路島合宿
古事の記のつたへる国生みは淡路島より生み出されゆく
古事の記のつたへる国生みの淡路の島に集ふはうれし
国生みの話をつたへる古事の記はたふとしありがたきかな
朝の集ひ
朝なぎの福良の海を漁船すべるがごとく進みいきたり
吹上の浜に集ひてみなともに「われは海の子」うたふはすがしも
（二回目の作品）
横畑雄基講師紹介の夜久正雄先生の「古事記」朗読のCDを聞きて
師の君のかたり給へる古事の記を聞き入りなつかしかりけり
かたり給ふみ声を聞けばいまにまたうつつにあへるここちするなり
慰霊祭
中秋の望月のもと浜辺にてみたままつりはおこなはれゆく
波の音虫の音のみの聞えくるまつりの庭はおごそかなりけり
祭文を誦みあげ給ふその声はしらべとなりて斎庭にひびきぬ
元三菱重工業㈱　島津正敷
徳島の鳴門の岬に近づけば緑と白の渦潮の見ゆ
満ち引きの差にて起これる渦潮の大きなる輪に驚きにけり
水底の岩にあたりて吹き上がる「潮の花」の力激しき
（二回目の作品）
中西輝政先生の講義を聴きて
いかならむ時に会ひてもおのがじし核心的価値は不動でありたし
小柳左門先生の講義を聴きて
師の君は泣ながらにすめろぎの述懐の御製読みたまひける

㈱ラック　高橋俊太郎

目をこらし渦潮さがし待ち続け見えたと思ひシャッターを切る

栗方惠美子

うづしほに遥か昔を懐かしみ時の流れの早さを思ふ

運営本部

合宿運営委員長　㈱寺子屋モデル　廣木　寧

北濱道さんの短歌創作導入講義を聴きてあななつかし六月ほど前にみまかりし友らのみうたきみはとりあぐ

大日方学弓立忠弘とふ友のみなさけうけしことのうかび来

愚かなるわれをも先輩とめでくれし友らの思ひ出よみがへり来ぬ

三十あまり五年ほどのをりをりに酒酌みかはせし友らなつかし

かたや教師かたや原子力発電に生涯かけしみいのちかしこし

（二回目の作品）

合宿が終はりて

ここ三年合宿運営に努めしは〝詩と哲学〟の奪回にして

わが国の歴史教育を受くるほど正しき歴史は知りがてになる

先人の思ひをもとに記すべきをなぞ隣国の容嘴ゆるす

いづ国も自国をあなどる教育をほどこす国はなかりとぞ思ふ

生れし国に生れし喜びを感ずるは詩の湧き出づる泉なりけり

先人のいかに生きむかと問ひませるその美しさが詩の母体なり

熊本県立熊本高校教諭　久保田　真

北濱道先輩の短歌創作導入講義を聞きてしきしまの歌は人柄伝ふると大日方さんの歌読みにけり

思ひやりのありて周りに気を配る人柄しのび読みたまひけり

元㈱アルバック　北濱　道

合宿初日の夕べのつどひにて頭上をあまた小鳥が嬉しげに鳴き飛ぶを見て

合宿のはじまるを祝ぎみおやらのみたまの我らを見守りますか

短歌創作導入講義

先輩と後輩のお姿偲びつつ講義の壇に立ちたしと思ふ（弓立忠弘先輩、大日方学君）

（二回目の作品）

全体感想自由発表にて

次々と壇に登りて若きらは思ひのたけを述べ給ひけり

いかにかと案ぜし学生も沁み〳〵と思ひを語るを聞くはうれしき

指揮班

福岡労働局　古川広治

朝のつどひの前に

ぽつりぽつりとふりくるそらにしばらくは雨まち給へと念じ皆を待つ

（二回目の作品）

大日方学先輩を偲ぶ

ひたすらに誠実に取組む先輩の御姿胸に浮かびくるかな

福田　仁

二十年を経て再開す友も我も頭髪寂しく人生折り返し点

（二回目の作品）

若者ら集ひて学ぶさま見ればわれも来し道懐かしきかな

ＦＴＩコンサルティング　伊藤俊介

蔭山武志君、小柳雄平君、高木雅史君を迎へる

東京ゆ深夜に運転代はりつつ八時間かけ来てくれしとふ

NTT西日本㈱　武田有朋

潮と潮のぶつかりあひたる水面より噴水のごとき波あまた立つ

記録班

北九州市立医療センター　森田仁士

鳴門渦潮クルーズにて

源平の歴史の残る島々を間近に見つつ船は進みぬ

美しき瀬戸の緑にとけ入りし大鳴門橋は雨に煙りぬ

海の面滝のごとくに落差見せ流るるさまにただにおどろく

渦潮の渦を間近に見てあれば引きこまる心地して手すりにぎりぬ

合宿地に寄せられし歌

青森市　長内俊平

翼あらば飛びても行きてみ友らと言交さむを肩抱き合はましを

よき友を得て帰りませよき友にまされる宝世にし無ければ

はるかにも朝夕べのみつどひを偲びあげつゝ日を送りなむ

東京都　坂東一男

新たなる仕組みのもとに集ひける合宿教室の弥栄祈らん

集ひける学びの友は真剣に新たなリーダーと学び深めん

集ひけむ学生の数は気になれど想ひの深さで熱き合宿にせん

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過しでせうか。南あわじ市「国立淡路青少年交流の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早三ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長の方々に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、編集することは、神経、時間の掛かる作業ではありますが、お一人お一人のみづみづしい心の動きをお偲びできる、心楽しく嬉しい時間でした。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一　「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二　「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌を作りましたが、第一回目のものは班別相互批評にて添削され、全参加者それぞれ一首以上をもれなく巻末の「短歌詠草」に収めました。また、感想文の執筆の折に作っていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。こちらの表記は全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長の方々以外にも多くのご協力を頂きました。お忙しい生業の傍らご協力いただきました池松伸典、蔭山武志、高木雅史、濱崎史嘉、佐野宣志、相澤守、の各氏に心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真はカメラマン中澤武之さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と存じます。お読みの後は、是非とも班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくことができますことを願ってやみません。

（北濱　道　記）

〔資料〕六十周年記念出版
第五十九回〝合宿教室（淡路）〟感想文集
非売品
平成二十六年十二月十五日発行
編集兼発行者
公益社団法人　国民文化研究会
理事長　今林賢郁
編集　北濱道・磯貝保博
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇